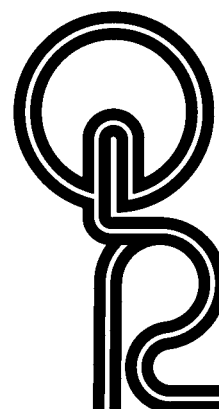
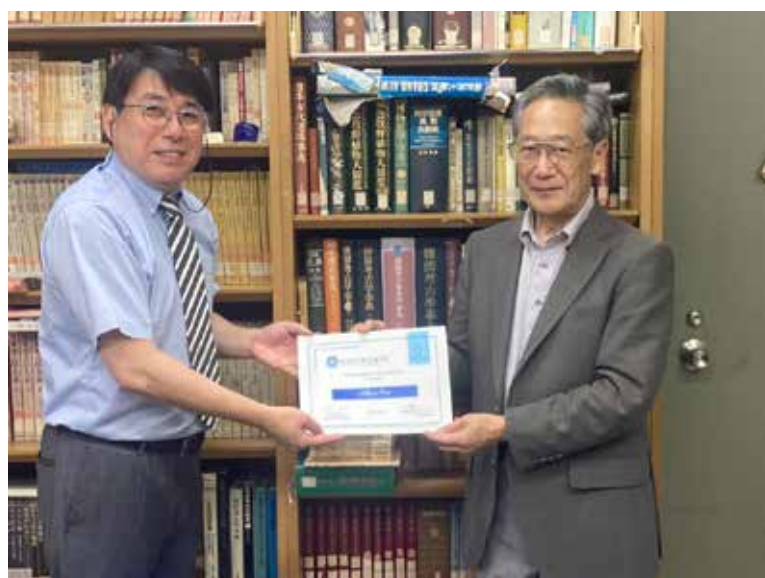


# QR Newsletter



## 第四紀通信

Vol. 30 No.4, 2023



INQUA2023年ローマ大会総会にて Honorary Life Fellows として承認され、出穂雅実会員(左)から授与の証書を受ける小野 昭元会長(右)(2023年7月、東京都立大にて)。

Vol. 30 No. 4

November 1, 2023

2023年大会開催報告..... 2	評議員会議事録..... 14
2023年大会若手・学生発表賞受賞者 報告.....6	総会議事録..... 24
2024年大会案内(第1報).....7	紙碑..... 34
JpGU2024案内(第1報)..... 7	お詫び..... 37
学会賞等受賞者の言葉..... 8	巡検案内..... 37
学会賞・論文賞等推薦のお願い..... 10	イベント参加者募集..... 38
執行部会議事録..... 12	会員消息..... 39

## ◆日本第四紀学会 2023 年大会報告

日本第四紀学会 2023 年大会は、2023 年 8 月 31 日から 9 月 4 日まで、狭山丘陵北麓に位置する早稲田大学所沢キャンパス（埼玉県所沢市）をメイン会場として実施しました。あいにく 9 月 4 日に実施する予定であった専門巡検は、台風接近に伴う悪天候のため大会期間中の実施は中止（本年 12 月に領域 3 活動として実施予定※本ニュースレター P37 参照）となりましたが、それ以外のプログラムは滞りなく実施することができました。

8 月 31 日には、プレ巡検と第 2 回評議員会を実施しました。プレ巡検では、「狭山丘陵南部、玉川上水を巡る」と題して、バス・鉄道と徒歩移動によって、村山上貯水池堰堤、狭山丘陵内のテフラ層、軽便鉄道跡のトンネル群、玉川上水などを巡りました。今年の猛暑を体現する炎天下の巡検でしたが、トンネルのお陰？もあってか、熱中症等体調不良になる参加者の方は誰一人もなく、3 名の案内人のもと全 11 名の参加者は新しい知見を得ました。詳細は次号の第四紀通信にて掲載予定です。

9 月 1 日と 2 日は一般研究発表が行われ、会員による口頭 29 件、ポスター 15 件の発表がありました。2 日間にわたる一般研究発表への参加者は会員・非会員を合わせて 121 名でした。口頭発表は各発表者が持参の PC を接続して行いました。ポスター会場は口頭発表会場前のアトリウムで行い、毎昼食後のコアタイムには多くの参加者が発表者らとポスター前で盛んに議論をしました（写真 1、2）。また、今大会の会場では企業ブースを復活させました。古今書院（書籍販売）、地学団体研究会（書籍販売）、株式会社パレオ・ラボ（業務内容の紹介）の 3 社（団体）から出展がありました。また、東京大学出版会と丸善書店の 2 社からは、

報告：2023 年大会実行委員会メンバー一同

見本展示や割引販売のパンフレット等を配架しました。

一般研究発表終了後の 2 日午後には総会をハイブリッド形式にて開催しました。総会終了後には、2019 年銚子大会以来となる懇親会を実施しました。キャンパス内の生協食堂で開催された懇親会には、当日飛び入り参加者もあわせて 53 名の参加がありました（写真 3）。鈴木会長のあいさつのおあと須貝副会長より辻 誠一郎会員（東京大学名誉教授）のご紹介があり、社会員に乾杯の発声をいただきました。社会員からは所沢キャンパスの場所が「お伊勢山遺跡」であり、建設前に長期間泊まり込みで遺跡調査をしたお話がありました。また、懇親会中には、授賞式とは一味違う学会賞・学術賞受賞者のスピーチや、本大会の若手・学生発表賞の結果発表に続き、授賞した会員には表彰状とともに早稲田大学オリジナルのマスコット「ビッグベア（おおくま）」が贈られました（※本ニュースレター P6 参照）

9 月 3 日はパブリックデー（一般公開日）として、シンポジウムと普及講演会を会場で開催したのち、キャンパス内の雑木林と湿地帯にてアウトリーチ巡検を実施しました。シンポジウム、普及講演会の詳細は後述しています。なお、アウトリーチ巡検については、宋 苑瑞大会実行委員による報告（P4 参照）をご覧ください。

今大会では、オンライン特別委員会と連携して、前回大会と同様に google sites による大会専用サイトの構築、google forms を用いた参加受付、発表者の講演要旨の収集を行いました。また、今大会から参加費等の事前決裁サービスを導入しました。このことによって事前準備や当日における大



写真 1：口頭発表会場風景

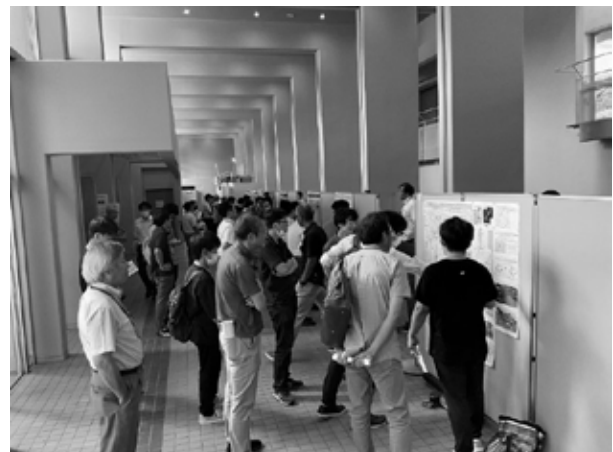


写真 2：ポスター発表会場風景

会受付業務を大幅に減らすことができました。

大会終了後に実施した参加者アンケートでは、会場が遠かった、教室の規模に比べスクリーンが小さかった、ロビーの空調の効きが悪かった、懇親会の提供サービスが悪かったなどのご意見をいただきました。この点についてはお詫びするとともに、来年夏に東北大学にて開催する2024年大会で改善できるように引継ぎします。本大会が会

員の皆様にとって日々の研究成果を発信でき、会員間での有意義な情報交換や議論の場となっていたということを切に願っています。大会開催では、早稲田大学所沢総合事務センター、早稲田大学の院生・学部生および卒業生、自然環境調査室メンバーには何かと支援いただきました。ここに感謝の意を記します。



写真3：懇親会風景

### ■シンポジウム「都市環境〜ウェルビーイングな社会創出のための第四紀研究」報告

2023年9月3日午前中に、表題のテーマをふまえ5名の専門家による話題提供が行われました。現地会場とオンラインあわせて90名ほどの参加がありました。以下、シンポジストの講演要旨を記します。

- ・天野正博氏（早稲田大学人間科学学術院・名誉教授）「気候変動緩和策と地域社会」：IPCC報告書を受け、脱炭素社会が想定するのは、グローバル市場での製品の生産、販売・購入ではなく、地域での地産地消と再利用も含めた循環経済を重視した社会市民の考え方や判断が重要で、市民が対策の前面に立つことが望まれる。
- ・知花武佳氏（政策研究大学院大学・教授）「都市の水害・治水」：石神井川に注目した整備途上と氾濫発生地の視察に基づいた水害リスクの考察。広い谷底平野と細い河道である現状をふまえ、河道整備と局所的対策により多くの地域住民は河道整備の現状と現時点のリスクを把握していない。
- ・北浦恵美氏（トトロのふるさと基金・事務局長）「トトロのふるさと基金による都市型自然保全：都市のコモンズを育む」：30年以上前からのトトロのふるさと基金によるナショナル・トラスト運動の歴史及び現状と課題の紹介。都市と自然が多く残る場所とが共存することの価値は今後ますます見直されるであろう。
- ・岸本年郎氏（ふじのくに地球環境史ミュージアム・教授）「都市の生物多様性：その価値とリス

ク」：大都市では独自の生態系が構築されていること、大規模な緑地ではかつての生物相の維持や周辺への供給源・避難地となっていること、外来生物が優占・卓越し侵略的外来生物の脅威と対応は世界的課題であること、都市と自然を対立したものではなく「都市は自然を内包したもの」として捉える視点が重要である。

- ・藤木利之氏（岡山理科大学・准教授）「岡山城堀堆積物にみる過去100年間の都市の環境史」：岡山城の東堀で柱状試料を採取し、花粉分析・Pb / Cs年代測定・珪藻分析・CNS分析などから過去約100年間の都市の環境史を復元、人新世の環境変化を議論する可能性がある成果が得られた。

各シンポジストの講演終了後には総合討論が行われました。各講演に対して活発に質疑応答が行われましたのち閉会となりました。2023年大会実行委員長であり本シンポジウム企画者の山田和芳氏から冒頭の趣旨説明で述べられた「現在を起点として過去の方向についての研究をする第四紀学だが、『今』という過ぎていく時間も地質学的には第四紀に区分される。人類進化と環境変化の相互関係も対象とする第四紀学で、人間が抱える諸問題も研究対象とすることが学問の裾野を広げる上でも重要であり、そのために『今』なにが起きているのかという知見を得ることが必要だ」というメッセージが見事に具現化されたシンポジウムでありました。

## ■普及講演会「武蔵野台地をとりまく関東平野の『でこぼこ』風景を読む」報告

日本第四紀学会の現会長であり、最近のNHK総合の番組「プラタモリ」や「チコちゃんに叱られる！」にも専門家として出演している鈴木毅彦教授（東京都立大学）に、「武蔵野台地をとりまく関東平野の『でこぼこ』風景を読む」と題した普及講演会を実施いただきました。現地会場とオンラインあわせて110名ほどの参加がありました。2023年大会会場となった埼玉県所沢市が立地する狭山丘陵や武蔵野台地を中心にして、関東平野の「でこぼこ」をテーマにして、地形のなりたち、それに影響を与えた地殻変動、さらには「でこぼこ」の地形特性にあわせた文化や社会の発展など多岐にわたる話題提供を行っていただきました。

一般向けの講演ということもあり、非常にわか

りやすく、しかも地図・衛星写真や現地写真をふんだんに使った講演内容でありました。会員としても改めて武蔵野台地周辺に関する最新の形成史を知れただけでなく、地形学の魅力を感じる機会となりました。

また、この後に続いて開催したキャンパス内に存在する雑木林と谷津湿地を巡るアウトリーチ巡検とも関連付けての講演を行っていただきました。巡検参加者にもより一層の理解を促すことができたと思います。また、鈴木会長もアウトリーチ巡検に参加していただくことができ、座学とフィールド観察のセットで普及講演会を実施していただき大変満足いく内容になっていました。

## 日本第四紀学会 2023 年大会アウトリーチ巡検報告（里山の風景を知り学ぶ、楽しい里山歩き会）

宋 苑瑞（早稲田大学教育学部・総合科学学術院・非、2023年大会実行委員）

日本第四紀学会 2023 年大会のアウトリーチ巡検は、「里山の風景を知り学ぶ、楽しい里山歩き会—早稲田大学所沢キャンパス内にみられる武蔵野の風景—」をテーマとして、早稲田大学所沢キャンパス自然環境調査室の竹内大悟氏、早稲田大学学生ボランティアグループ「所沢キャンパス湿地保全活動」の岡田知樹代表、早稲田大学教育学部・総合科学学術院の久保純子教授の案内で実施された。

募集は一般 30 人（親子、非会員も参加可能）を定員とし、24 名の申込があったが、案内者や鈴木会長を含む 23 名が参加した。9 月 3 日 15 時に早稲田大学所沢キャンパスで集合し、教室内で保全活動の説明を受けた後に、徒歩で早稲田大学所沢キャンパスの B 地区に移動した。早稲田大学所沢キャンパスは「首都圏に浮かぶ緑の島」と呼ばれ

る狭山丘陵の北側に位置し、まだ多くの自然が残っている。早稲田大学所沢キャンパスは、大学の施設が集中している A 地区と、まだ自然環境が多く残っている B 地区に分かれている。A 地区から徒歩数分の距離ではあるが、景色が全く異なり、大学内の敷地であることを忘れるほど自然が多い。

早稲田大学の自然環境調査室は、所沢キャンパス人間科学部が開設された 1987 年に設置され、周辺に良好な自然環境が残存しているキャンパスにおいて、自然環境の調査と研究を行うために作られた。早稲田大学所沢キャンパスの自然環境を特徴づけているのは、狭山湖水源林から連なる里山林と水田放置跡の湿地である。コナラ、エゴノキが優先する雑木林やシラカシを中心とした旧屋敷林、ヨシなどの植物が繁茂する湿地が、多様な生物の生息環境を作っている。かつての B 地区には約 170 枚の水田が存在していたが、1987 年 4 月所沢キャンパスの開設を機に水田は使われなくなったが、2002 年より自然環境調査室の管理により水田の畦が復元され、湿地の乾燥化に対する効果的な管理法に関する調査研究もされている。2010 年からは実際の稲作が始まり、早稲田大学の学生や市民などの希望者が田植え、稲刈りなどの活動に参加している。

現地では、地区内の散策路を歩きながら谷津湿地、湧水地の見学、里山植生や小動物などの観察を行った。また、植生や動物の調査、生物多様性の実現のための様々な工夫と努力が続いていて驚いた。稲作も毎年繰り返されているのではなく、4



早稲田大学所沢キャンパスで説明を受けるアウトリーチ巡検参加者（撮影：久保純子）



水田を通り雑木林の観察に向かう参加者  
(撮影：久保純子)



早稲田大学所沢キャンパス B 地区で植生の変遷について説明する竹内大悟氏 (撮影：久保純子)

年に 1 回は休作し、休作中に他の植生が水田で繁茂することをわざと放置して多くの植物が生息できる環境を作っていた。

大学のキャンパス内の巡検だったため、軽い気持ちで参加したが、傾斜地の上り下りも多く、歩く距離も長く参加者は多くの汗を流した。約 2 時間の巡検が終わり、17 時過ぎに解散した。

アウトリーチ巡検では、現地での竹内大悟氏に

よる詳細な解説と案内によって、狭山丘陵における生物多様性保全への努力を肌で感じることができた。現地案内者の竹内氏と岡田代表、サポートして頂いた早稲田大学自然環境調査室とボランティア学生の皆様に深く御礼を申し上げたい。

(参考) 早稲田大学自然環境調査室

<http://www.waseda.jp/nerl/wetland.html>



早稲田大学所沢キャンパス B 地区でアウトリーチ巡検参加者の集合写真 (撮影：宋 苑瑞)

## ◆ 2023 年大会若手・学生発表賞受賞者

2023 年所沢大会において若手・学生発表賞にエントリーされた発表の中から、若手・学生発表賞選考委員会（吾妻 崇委員長、加 三千宣委員、長橋良隆委員、楡井 尊委員、小荒井 衛委員）による選考結果とその後の執行部会での承認により、下記の方々の受賞が決まりました。

### ■口頭若手部門 1 名（選考対象 2 件）

受賞者：中西 諒会員

タイトル：北海道日高北部地域における津波堆積物から推定される複数の津波波源

発表者：中西 諒（京都大学）・芦 寿一郎（東京大学）・岡村 聡（北海道教育大学）・横山祐典（東京大学）・宮入陽介（東京大学）

### ■口頭学生部門 1 名（選考対象 5 件）

受賞者：レゲット 佳会員

タイトル：表面照射年代測定を用いた岩手県侍浜

における海成段丘の離水年代について  
発表者：レゲット 佳（東京大学）・横山祐典（東京大学）・宮入陽介（東京大学）・白濱吉起（産業技術総合研究所）・阿部恒平（応用地質株式会社）・照沢秀司（応用地質株式会社）

### ■ポスター若手部門（選考対象 1 件）

該当者なし

### ■ポスター学生部門 1 名（選考対象 5 件）

受賞者：安東 梢会員

タイトル：放射性炭素を用いた魚類水晶体の炭素源の定量的評価

発表者：安東 梢（東京大学）・宮入陽介（東京大学）・西田 梢（筑波大学）・林 正裕（海洋生物環境研究所）・横山祐典（東京大学）



受賞者を囲んでの記念写真（2023 年大会懇親会での受賞式にて）  
左から、池原行事委員長、中西会員、安東会員、レゲット会員、鈴木会長

## ◆日本第四紀学会 2024年大会案内(第1報)

日本第四紀学会 2024年大会は以下の日程で開催予定です。ただし、今後の社会状況によっては、一部変更・中止になることがあります。

日程：2024年8月29日(木)～9月2日(月)

8月29日(木) 評議員会

8月30日(金) 一般研究発表(口頭及びポスター)

8月31日(土) 一般研究発表(口頭及びポスター)、総会(ハイブリッド形式)、懇親会

9月1日(日) シンポジウム/普及講演会(公開/ハイブリッド形式)

9月2日(月) 専門巡検

開催場所：(会場) 東北大学青葉山キャンパス(宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉)

開催方法：完全対面方式(一部除く)を基本とします。今後の社会状況次第では完全オンライン方式に移行する場合があります。

大会実行委員長：堀 和明(東北大)

実行委員：遠田晋次、石澤亮史、高橋尚志、井龍康文、浅海竜司、山田 努(東北大)、伊藤晶文、目代邦康(東北学院大)、西城 潔(宮城教育大)、池原 実(高知大・行事委員長)ほか

## ◆日本地球惑星科学連合 2024年大会(JpGU2024)のお知らせ(第1報)

2024年5月26日(日)～31日(金)の6日間の日程で、日本地球惑星科学連合 2024年大会(JpGU2024)が、現地(幕張メッセ)とオンラインをミックスしたハイブリッド形式にて開催されます。JpGU2024では、宇宙惑星科学、大気水圏科学、地球人間圏科学、固体地球科学、地球生命科学、教育・アウトリーチ、複数領域の7つの一般カテゴリーに加えて、一般市民参加者向けのパブリックセッション、全分野に関する話題を取り上げるユニオンセッションなどが企画される予定です。日本第四紀学会ではこれまでと同様に、「第四紀：ヒト—環境系の時系列ダイナミクス」を単独で、「活断層と古地震」を他学会と共同で主催してセッション提案をおこないます。ほかにも第四紀に関連するセッションが多数提案される見込みです。会員の皆様の積極的参加を期待しています。

大会に関する詳細は [https://www.jpogu.org/meeting\\_j2024/](https://www.jpogu.org/meeting_j2024/) をご覧ください。

## 【大会の概要】

開催日時：2024年5月26日(日)～31日(金)

開催形式：ハイブリッド(現地+オンライン)

現地会場：千葉県千葉市幕張メッセ

## ●口頭発表

口頭セッションにて現地で、あるいはオンラインからZoom経由で、ライブ発表(ハイブリッド)

## ●ポスター発表

オンライン掲示が必須、現地での発表は任意

口頭発表枠内でフラッシュトークあり

オンラインポスターセッション(注 コアタイムに相当)は実施せず

## 【主な日程】

セッション提案 2023年10月2日(月)～11月1日(水)

開催セッション公開 2023年12月8日(金)

コマ割公開 2023年12月19日(火)

投稿受付 2024年1月11日(木)～2月15日(木)

※早期締切 2/1(木) 23:59

◆ 2023 年学会賞等受賞者の言葉

＜学会賞 受賞者の言葉＞ ..... 兵頭政幸 (神戸大学)



この度は、栄誉ある「日本第四紀学会学会賞」を授与して頂き、誠にありがとうございます。学術賞受賞以降の成果を評価し、選考していただいたことを大変うれしく思います。推薦者並びに委員の皆様、厚く御礼申し上げます。

私は神戸大学で安川克己先生のご指導のもと研究活動を開始し、線形システム理論による堆積残留磁化機構の研究で学位を取得しました。ポスドク時代に人類学者の渡辺直経先生に導かれて行ったインドネシア・サンギランのジャワ原人化石産出層の磁気層序研究が第四紀研究の出発点になります。これが縁で、その後中国やアフリカの人類化石産出層の研究にも携わることができました。

私の研究は、阪神淡路大震災直後に産総研が採取し兵庫県立人と自然の博物館に収蔵された大阪湾 1700m コア (K1) との出会いで大きく転換します。加藤茂弘氏の協力を得て、基盤岩直上まで過去 310 万年間の大坂層群の磁気層序を確立した後、同コアの海成層を用いた間氷期ごとの海水準・古気候変動の研究を開始し、その後 4 半世紀以上続けました。この研究は、花粉・珪藻化石群集解析ができる体制作りから始め、それぞれ松下まり子氏、佐藤裕司氏の協力により実現しました。間

氷期の中で MIS19 の成果は、千葉セクション、中国黄土層、北大西洋コアの高解像度気候層序対比を可能にし、また、同コアから復元した複数の小反転を伴うマツヤマーブリュンヌ (MB) 地磁気逆転トランジションはその後二つの研究に発展します。

その一つはジャワ原人化石産出層の年代論争への挑戦です。サンギランでも小反転を伴う MB トランジションを見つけ MB 極性境界を確定しました。そして、 $^{40}\text{Ar}/^{39}\text{Ar}$  年代に基づく同層の Long chronology の一角を崩し、その後、最初の原人のサンギランへの到着年代を確定して (Matsuyama et al., 2020)、日本-インドネシア研究チームが推す Short chronology の信頼度をさらに上げました。二つ目は銀河宇宙線量と下層雲量の正の相関 (スベンスマルク効果) に基づく“地磁気と気候のリンク”の検証です。逆転時の地磁気強度減少に伴い銀河宇宙線、雲が増加し、雲の日傘効果で寒冷化するという仮説をたて、その寒冷化の証拠を、大阪湾 1700m コア、中国黄土層などで見つけました。

逆転期の地磁気方向変化に関して、極めて短期間に反転が起こると主張するも、データに基づく具体的年数は提示できないままでした。しかし、水月湖年縞堆積物と出会い、ラシャンエクスカベーション中の地磁気の反転が年縞カウントにより最速 38 年と決定でき、その壁を突破することができました。

振り返ると人と研究試料との出会いが私の研究推進の原動力だった気がします。この場を借りて、国内外の共同研究者の皆様、感謝申し上げます。また、共に歩んでくれた、共同研究者でもある神戸大学の学生の皆様にも感謝します。



<学術賞 受賞者の言葉> ..... 池原 実 (高知大学海洋コア国際研究所)



この度は、日本第四紀学会学術賞を授与していただき誠にありがとうございます。推薦者ならびに選考委員の皆様には厚く御礼申し上げます。また、これまでの研究活動で指導して下さった先生および諸先輩、共同研究者の方々、研究室の学生諸氏および分析等を支援して下さった方々に深く感謝いたします。

私の研究活動は金沢大学の小西健二先生の研究室に入ったことでスタートしました。当時、小西先生が国際深海掘削計画 (ODP) の航海に乗船した直後で、持ち帰ったグレートバリアリーフ沖の深海堆積物を卒論の材料として各種の分析を行いました。現在の職場である高知大学海洋コア国際研究所は、ODP 後も継続している IODP (国際深海科学掘削計画) のコア保管と解析の国際拠点であり、大いなる巡り合わせを感じています。金沢大学では有孔虫の安定同位体分析を軸とした修士研究を大場忠道先生にお世話になりながら実施し、博士課程では東京大学海洋研究所の平 朝彦先生の下で白鳳丸、淡青丸、ジョイデス・レゾリューションなどの多くの航海に送り込まれて、海洋観測の修行をしながら博士研究を進めました。その中で南大洋の古海洋変動を復元しようとしたときに、新たに取り組んだ分析手法がバイオマーカー分析でした。これらの分析は北海道大学低温科学研究所で海洋環境グループを構成していた河村公

隆先生と大河内直彦先生に指導していただきました。特に、大河内さんには不慣れな有機地球化学分析のノウハウを全て伝授してもらい、短期集中分析によって貴重かつ重要なデータセットを創出することができました。

南大洋はグローバルな気候変動にとって重要な位置づけだという認識は多くの研究者が共有していたのですが、地理的な制約から低～中緯度の古海洋学に比べて圧倒的に立ち後れていました。D1 の終わりに 3 ヶ月間乗船した白鳳丸 KH-94-4 航海では、タスマニア島の南方にあるタスマン海台をターゲットの 1 つに設定し、複数の海洋コアを採取して多くの共同研究者の協力を得ながら古海洋変動研究を進めました。ちょうど有用性に注目が集まり始めていたアルケノン古水温計をタスマン海台コアに適用することで、南大洋で初めて氷期一週氷期スケールの表層水温変動を明らかにすることが出来ました。論文を公表した翌年の国際学会で、我々の結果を引用して議論が展開されている発表を聴きながら「よしっやった!」と思うと同時に、論文を書くことの重要性を実感したのをよく覚えています。

2001 年に高知大学で助手になって以降、ご当地研究もやろうと考えて黒潮と亜熱帯循環の変動を時空間的に復元する共同研究にも取り組んでいます。南大洋の古海洋学も継続しており、幸いにして多くの共同利用航海に採択され、白鳳丸を活用した南大洋航海は 6 回に及んでいます。最近では、珪藻、放散虫、海綿骨針など生物源オパールのある同位体分析ができる体制も高知大に整備し、有孔虫が保存されにくい極域海洋や CCD 以深の堆積物を対象とした古海洋変動研究にも取り組んでいます。これら多種多様なコアと分析手法を活かした第四紀の古海洋変動研究を今後も続けていくことで第四紀学会にも貢献したいと考えています。引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

＜学術賞 受賞者の言葉＞ ..... 堀 和明（東北大学）



この度は、栄誉ある日本第四紀学会学術賞を頂き、大変光栄に存じます。推薦して下さった方、選考委員会の方々に深く感謝いたします。また、共同研究者のみなさまに厚く御礼申し上げます。

私は、故米倉伸之先生や茅根 創先生にご指導をいただき、卒論や修論で沖積平野の発達史や島棚地形に関する研究をしていましたが、研究の方向性がうまく定まらず、フラフラして路頭に迷いかけていました。博士課程進学後、当時地質調査所海洋地質部におられた齋藤文紀さんにご指導いただける機会を得て、つくばに引っ越し、デルタに関する研究を始めることになりました。齋藤さんからは、堆積物の見方や、堆積物から地形や堆積システムを捉えることの大切さのみならず、文献レビューから用語の使い方まで、研究の基礎を丁寧に教えていただき、長江や紅河デルタの研究に入り込んでいくことができました。また、当時の海洋地質部には、私と同年代の大学院生やポス

ドクの方がたくさんおられ、いろいろな刺激を受けました。アジアのデルタを対象とした研究では、河川・潮汐卓越型エスチュアリーの堆積相、デルタ形成初期の堆積相と堆積様式、後氷期海水準変動への沖積低地の応答について興味深い結果を得ることができました。

大学に職を得て、つくばを離れてからは、自立して研究を進めること、さらに国内の平野から得られた知見を国外に発信していくことが必要だと考え、濃尾平野の氾濫原や天竜川のファンデルタ、越後平野の中流部、石狩平野の三日月湖などを対象に、共同研究者や学生とともに、沖積層および沖積層から構成される地形の形成過程の解明に取り組んできました。機械ボーリングやハンドオーガで採取した堆積物の観察・分析を通じて、これまでに日本の沖積平野から得られている膨大なボーリング柱状図をどのように扱えばよいかについても少しずつみえてきました。また、学生の頃からぼんやりと考えていた流域全体を対象とした研究にも取り組んでいるところです。

興味が発散しがちで、成果公表も遅れている点は否めませんが、四半世紀前に感じることもできた研究のおもしろさを忘れずに、これからも自分の体と頭を働かせて研究を実施したいと考えています。最後になりますが、沖積平野での堆積物採取にあたっては、地権者やボーリング業者の方々に多大なご協力をいただけてきました。この場を借りてお礼を申し上げます。今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

◆ 2024 年日本第四紀学会学会賞・論文賞等の推薦のお願い

「日本第四紀学会会則」の第3条(3)に基づき、2024年日本第四紀学会学会賞（以下、学会賞）、日本第四紀学会学術賞（学術賞）、日本第四紀学会若手学術賞（若手学術賞）並びに日本第四紀学会論文賞（論文賞）、日本第四紀学会奨励賞（奨励賞）の受賞候補者の推薦募集を行います。前3賞は学会賞選考委員会が会員からの推薦をもとに受賞候補者を選考し、後2賞は論文賞選考委員会が会員からの推薦を参考に受賞候補者を選考します。最終的に2024年6月頃に開催される評議員会で受賞者が決定され、2024年大会で表彰される予定です。会員のみなさまからの多数のご推薦をお待ちしております。

なお、推薦にあたっては、学会HPの「会則・規則」のページ (<http://quaternary.jp/intro/rules/rules.html>) に掲載されている「日本第四紀学会顕彰規程」及び関連する内規をご参照の上、下記に従って推薦書類をお送り下さい。また、過去に受賞した会員は、論文賞を除き同じ賞を受賞することはできませんので、学会HPの「歴史」のページ (<http://quaternary.jp/intro/history.html>) で歴代受賞者を事前にご確認頂きますようお願い致します。

## 1. 各賞の概要と推薦書類の記入内容

## ■学会賞・学術賞

学会賞と学術賞は、第四紀学の発展に寄与する研究や学会活動への貢献を行ってきた会員に贈られる賞です。

学会賞：第四紀学の発展に貢献した顕著な業績や活動および学会活動に貢献した正会員に授与。学会における最高の賞。毎年若干名。

学術賞：第四紀学の発展に貢献した優れた学術業績をあげた正会員に授与。優れた編書、著書、論文などの一連の業績が対象。対象成果が複数の著書（研究グループ等を含む）によりなされた場合には、筆頭著者または代表者に授与。毎年若干名。

下記の情報を記した推薦書類を作成して、主要業績リストと併せて日本第四紀学会事務局へ送付して下さい。

- (1) 推薦者の氏名・所属・連絡先（自薦を含む）
- (2) 賞の名称
- (3) 候補者の氏名・所属・連絡先
- (4) 学会賞の場合には、具体的な業績や活動内容を示した受賞件名  
学術賞の場合には、授賞の対象となる一連の業績を含めた受賞件名
- (5) 推薦理由（1000字以内）

## ■若手学術賞

若手学術賞は国際誌等における研究発表を通して第四紀学に貢献した優れた学術業績をあげた若手会員（2024年4月1日時点で39歳以下の会員）に授与されるものです。受賞者数は若干名で、受賞対象は過去2年間の国際誌等に掲載された論文（オンライン化された論文を含む）の筆頭著者としてします。受賞者には副賞として5万円の奨学金が授与されます。

下記の情報を記した推薦書類を作成し、推薦する論文のPDFとともに学会事務局へ送付して下さい。

- (1) 推薦者の氏名・所属・連絡先（自薦を含む）
- (2) 賞の名称
- (3) 候補者の氏名・所属・連絡先
- (4) 推薦論文題目、論文が掲載された雑誌名および出版年月・巻・号・頁、またはオンラインの公開日及びDOI
- (5) 推薦理由（800字以内）

## ■論文賞・奨励賞

論文賞と奨励賞は、過去2年間に刊行された「第四紀研究」（第61巻第1号～第62巻第4号）に掲載された論文と著者が対象となります。ただし、編集委員会が非会員や学会賞・学術賞受賞者へ依頼した論文は対象外となります。

論文賞：会員である論文著者全員に授与。毎年1～2件程度。対象は掲載された全ての論文（短報を含む）。

奨励賞：会員である筆頭著者に授与。年齢は2024年4月1日時点で35歳以下。毎年1～2件程度。

受賞者には副賞として5万円の奨学金が授与されます。

推薦書類には下記の情報を記し、学会事務局へ送付して下さい。

- (1) 推薦者の氏名・所属・連絡先（自薦を含む）
- (2) 賞の名称
- (3) 論文賞の場合には、全著者名と推薦論文名
- (4) 奨励賞の場合には、候補者名と推薦論文名
- (5) 推薦理由（1000字以内）

## 2. 推薦書類の送付先

各賞の推薦書類は、郵送または電子メールで日本第四紀学会事務局へ送付して下さい。送付先の住所ならびに送信先のメールアドレスは下記のとおりです。

郵送：〒169-0072 東京都新宿区大久保2丁目4番地12号 新宿ラムダックスビル

メールアドレス：daiyonki(at)shunkosha.com

郵送の場合の宛名は、学会賞・学術賞・若手学術賞の推薦書類については、「日本第四紀学会 学会賞選考委員会」宛、論文賞・奨励賞の推薦書類については「日本第四紀学会 論文賞選考委員会」宛として下さい。

電子メールの場合には、上記のそれぞれの宛先名を電子メールの件名に入力して送信して下さい。なお、PDF 等のファイルを電子メールで送る場合、その容量が大きい場合（10MB 以上）には、ファイル転送サービスを利用して下さい。

### 3. 提出期限

推薦書類の提出期限は、いずれも 2024 年 2 月 29 日（木）（必着）です。

## ◆日本第四紀学会 2023 年度第 1 回執行部会議事録

日 時：2023 年 7 月 31 日（月）9:00～12:30

方 法：Zoom システムを用いたオンライン会議

出席者：鈴木毅彦（会長）、北村晃寿（副会長）、須貝俊彦（副会長）、吾妻 崇（領域 2 代表）、池原 実（行事委員長）、荻谷愛彦（編集委員長）、山田和芳（庶務委員長）、堀和明（会計委員長）、白井正明（渉外委員長）、里口保文（領域 3 代表）、小荒井衛（領域 5 代表）

欠席者：海部陽介（領域 4 代表）、那須浩郎（広報委員長）、横山祐典（領域 1 代表）

### 主な報告事項

- (1) INQUA2023 ローマ大会が開催された。代表派遣、巡検参加者、若手派遣支援 2 名に原稿を依頼し、第四紀研究に最終報告を提出することとする。次回開催地はインドの予定である。
- (2) 故鎮西清高名誉会員・元会長の紙碑は北村副会長が作成することとなった。
- (3) 転載許可申請 3 件、後援申請 1 件を承認した。
- (4) 2022 年度収支会計報告が行われた。会計監査を受け、評議員会と総会で報告を行う。
- (5) 第四紀研究第 62 巻第 3 号刊行に向けて最終作業を行った。
- (6) 2021 年大阪大会シンポジウム特集号、福岡シンポジウム特集号の編集を進めた。
- (7) 受理済み論文について J-STAGE で早期公開を行った。7 月 23 日現在の通常号手持ち原稿（書評を除く）は受理前 9 編、受理済み 2 編である。
- (8) 第四紀通信第 30 巻第 3 号の発行、および電子版（PDF 版）を学会ホームページに掲載する準備を行った。
- (9) 2023 年大会（早稲田大学所沢キャンパス）の準備状況についての報告があった。今後ハイブリッド開催に関しての参加者周知について広報・オン

ライン委員会と検討を進める。

(10) 7 月 25 日に開催された防災学術連携体に、鈴木会長と担当の小荒井委員が参加した。

(11) 各領域の活動方針について報告があった。複数の領域を横断するシンポジウムの開催を検討していく。（領域 3）学会パンフレットの制作の準備を進めている。（領域 5）

### 主な審議事項

- (1) 第 1 回評議員会で承認した、常設委員会委員長・領域代表・オンライン委員長・会計監査を除いた委員について、8 月初旬に電磁的評議員会を開催し承認を得ることとした。
- (2) 日本第四紀学会ロゴマーク使用規程について審議し、これを承認した。
- (3) 論文賞に関係した顕彰規程等の改正について審議し、これを承認し、評議員会に諮ることとした。
- (4) 転載許可申請の流れの変更、入会手順の省力化の各方針について説明があり、審議の結果、方針を承認した。
- (5) 2023 年度の事業計画案を承認した。
- (6) 2023 年度の予算案の提案を承認した。
- (7) 会議等での旅費支給の基準となる内規の試案、アルバイトの時間給単価変更（値上げ）についての試案を作成し、次回の執行部会で検討することとした。
- (8) 2023 年大会開催中における若手・学生発表賞の審査・結果発表および授賞式のスケジュールについて議論した。選考プロセスについて、メール等を用いて執行部会で引き続き審議することとした。
- (9) 若手・シニア会員割引・終身会員制など会費に関して、学会設立 70 周年に関連する特別委員会設置に関して検討を進めることとし、繰越金の削減に向けて長期的な検討を行うこととした。

以上

◆日本第四紀学会 2023 年度第 2 回執行部会議事録

日 時：2023 年 9 月 2 日（土）17:00～17:30  
 場 所：早稲田大学所沢キャンパス第 4 会議室(埼玉県所沢市)  
 方 法：対面+ Zoom オンライン（ハイブリッド）  
 出席者：鈴木毅彦（会長）、北村晃寿（副会長）、須貝俊彦（副会長）、山田和芳（庶務）、堀 和明（会計）、荻谷愛彦（編集）、池原 実（行事）、白井正明（オンライン：渉外）、横山祐典（領域 1）、吾妻 崇（領域 2）、里口保文（領域 3）、小荒井 衛（領

域 5）  
 欠席者：那須浩郎（広報）、海部陽介（領域 4）

**主な審議事項**

(1) 顕彰規程及び若手・学生発表賞選考に関する内規に基づき、発表賞選考委員会から選考結果について報告がなされた。その後、委員の利益相反を確認し、該当した委員を除いて審議を行い、若手・学生発表賞の受賞者を決定した。

以上

◆日本第四紀学会 2023 年度第 1 回通信執行部会議事録

開催機関：2023 年 8 月 11 日（金）18:24～8 月 18 日（金）24:00

下記 2 件について日本第四紀学会執行部会規程第 10 条（執行部会では、会長が必要と認める場合には、会合の開催のほかに、電磁的な方法を用いて、審議を行うことができる。）に基づき、執行部会メーリングリストを用いた電子メールで審議し、承認された。

**審議事項**

1. 2023 年大会の若手・学生発表賞の選考スケジュール案の承認  
 9 月 2 日（土）の 15:00 以降の若手・学生発表賞の選考スケジュール案は以下の通りとする。

15:00 一般研究発表終了  
 15:15～17:00 2023 年度総会開催（ハイブリッド形式）  
 17:00～17:30 第 2 回執行部会にて、選考委員会から提案された若手・学生発表賞の評価の審議（ハイブリット形式）  
 同日 17:30 までに承認された発表を同日の懇親会で審査結果を発表し、表彰する。ただし、未承認の場合は、9 月 2 日以降に 2023 年度第 2 回通信執行部会を開催し、審議する。  
 2. 9 月 2 日（土）17:00～17:30 の第 2 回執行部会の開催の承認  
 2023 年大会の若手・学生発表賞の選考に関する審議を行う。

以上

◆日本第四紀学会 2023 年度第 3 回執行部会議事録

日 時：2023 年 10 月 14 日（土）9:00～12:30  
 方 法：Zoom システムを用いたオンライン会議  
 出席者：鈴木毅彦（会長）、北村晃寿（副会長）、須貝俊彦（副会長）、山田和芳（庶務委員長）、堀 和明（会計委員長）、荻谷愛彦（編集委員長）、池原 実（行事委員長）、白井正明（渉外委員長）、横山祐典（領域 1 代表）、吾妻 崇（領域 2 代表）、里口保文（領域 3 代表）、  
 欠席者：那須浩郎（広報委員長）、海部陽介（領域 4 代表）、小荒井 衛（領域 5 代表）

**主な報告事項**

(1) 2023 年大会（早稲田大学所沢キャンパス）の開催報告および収支決算報告が行われた。  
 (2) 転載許可申請 2 件、共催申請 1 件の承認を報告した。  
 (3) 2023 年 11 月発行予定の第四紀研究第 62 巻第 4 号の編集作業を行った。  
 (4) 2021 年大阪大会シンポジウム特集号、2020 年福岡シンポジウム特集号に掲載予定の受理済み論文について J-STAGE で早期公開を行った。  
 (5) 第四紀通信第 30 巻第 3 号の発行、および電子版（PDF 版）を学会ホームページに掲載した。  
 (6) 2023 年大会における若手・学生発表賞受賞者を決定して、授賞式を行った。

(7) 日本地球惑星科学連合 (JpGU) 2024 年大会の開催内容、パブリックセッションのテーマ、開催スケジュールについての報告が行われた。日本第四紀学会が共催するセッションについて各領域も検討することとなった。

(8) 各領域の活動状況について報告があった。

### 主な審議事項

(1) 終身会員 (シニア会員) 制度設計に向け、他学会の動向を把握するなどのスケジュールを確認して、準備作業を開始することを承認した。

(2) 事務局からの郵送物に会員番号の記載ミスがあった旨、第四紀通信 (第 30 巻 4 号) にお詫びの文書掲載をすることを承認した。

(3) 第 2 回評議員会にて議論された懸案事項について整理して、情報共有を行った。

(4) 転載許可申請の様式変更について説明があり、一部の表現方法についてメール等を用いて執行部会で引き続き審議することとした。

(5) 学会賞・学術賞・若手学術賞の候補者推薦、論文賞・奨励賞の候補者・候補論文推薦の締め切りを 2024 年 2 月 29 日、各選考委員会の選考答申の締め切りを 2024 年 5 月 31 日とすることを承認した。

(6) 学会設立 70 周年に関する記念事業について、特別委員会を立ち上げることとし、記念シンポジウム、一般書籍の刊行を行う方針とした。特別委員会の委員長は鈴木毅彦会長とし、任期は 70 周年記念事業の終わりまでとし、委員には、庶務委員長、行事委員長、2026 年 70 周年記念大会実行委員長、一般書籍の編集委員長ほかとすることを承認した。また、2025 年大会の開催場所は地方とし、2026 年の 70 周年大会開催場所は首都圏とすることを承認した。一般書籍刊行に向けての編集委員会を立ち上げ、編集委員会の委員長は須貝俊彦副会長とし、領域代表を委員とすることを承認した。他の委員選出は編集委員長と領域代表で調整することとした。また、内容とスケジュールは次回執行部会にて検討することとした。

(7) 学会の Zoom 契約状況について現状を確認して、次回執行部会にて議論することとした。

(8) 「第四紀研究」特集号に掲載予定の受理済み論文について J-STAGE 上の早期公開論文認証 (エンバーゴ) を解除することを承認した。今後、特集号掲載論文は J-STAGE 早期公開当初から認証不要とする。

(9) 2024 年大会の日程を 2024 年 8 月 29 日～9 月 2 日とし、開催会場を東北大学青葉山キャンパス (宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉)、大会実行委員長を堀 和明 (東北大)、実行委員に遠田晋次、石澤堯史、高橋尚志、井龍康文、浅海竜司、山田努 (東北大)、伊藤晶文、目代邦康 (東北学院大)、西城 潔 (宮城教育大)、池原 実 (高知大・行事委員長) ほかとする報告があり、これを承認した。

(10) 2023 年日本第四紀学会学会賞・学術賞受賞記念講演会については、2024 年 2 月 17 日 (土) に Zoom システムを用いた方法で開催することを承認した。

(11) 日本地球惑星科学連合 (JpGU) 2024 年大会で単独開催する「第四紀」セッションについて、代表コンビナーに白井正明渉外委員長、共同コンビナーに横山祐典、吾妻 崇、里口保文 (各領域代表) の 3 名を選定した。

(12) 領域 1 提案のイベント「堆積層岩相記載武者修行イベント」(2024 年 2 月 1 日～4 日開催) を承認し、今後細部を詰めたうえで、積極広報する方針を確認した。

(13) 領域 3 提案の巡検「入間川沿いに露出する下部更新統仏子層の観察」(2023 年 12 月 16 日開催) を承認し、今後積極広報することとした。

(14) 領域 4 提案の植生史学会・花粉学会合同大会の公開シンポジウム「南九州の森、火山、ヒト」(2023 年 12 月 2 日開催) を日本第四紀学会も共催として実施することを承認した。

(15) 会長、副会長の議決権に関する会則等改正について議論し、次回執行部会にて原案を作成して評議員会に諮ることとした。 以上

## ◆日本第四紀学会 2023 年度第 1 回通信評議員会議事録

開催機関：2023 年 8 月 11 日 (金) 17:10～8 月 18 日 (金) 24:00

審議事項について評議員会メーリングリストを用いた電子メールで審議し、評議員 35 名のうち 30 名から、承認の回答があった。よって、日本第四紀学会評議員会規程第 6 条 (電磁的な方法で開催

された評議員会での議決は、会則第 14 条 7 に従う) と会則第 14 条 7 (電磁的方法をもって評議員会を開催し、2 分の 1 以上の返信をもって成立させることができ、審議に加わった評議員の過半数が同意の意思表示をしたときは、議決することができる。) に則り、下記は承認された。これによって日本第四紀学会 2023～2024 年度役員体制が決

定した。(総会議事録の資料 8 参照)

### 審議事項

1. 常設委員会委員、オンライン委員会委員、論文

賞選考委員会の選出

2023 年度第 1 回評議員会にて未承認であった上記委員会および委員について承認を求める。

以上

## ◆日本第四紀学会 2023 年度第 2 回評議員会議事録

日 時：2023 年 8 月 31 日 (木) 16:00 ~ 19:00  
場 所：早稲田大学所沢キャンパス第 1 会議室(埼玉県所沢市)  
方 法：対面+ Zoom オンライン (ハイブリッド)  
出席者：鈴木毅彦 (会長)、北村晃寿 (副会長)、須貝俊彦 (副会長)、<以下、評議員> 三田村宗樹 (議長)、池原 実、加 三千宣、吾妻 崇、奥村晃史、荻谷愛彦、久保純子、佐藤善輝、堀 和明、里口保文、青木かおり、水野清秀、井上 淳、中塚 武、小荒井 衛、石原与四郎、山田和芳  
委任状：議長委任 17 通  
オブザーバー出席：青木まどか・永峯菜穂子 (事務局)

北村晃寿副会長の司会で開催され、鈴木毅彦会長の挨拶があり、定足数の確認を行った。以降は三田村議長による議事が進められた。最後に須貝俊彦副会長の挨拶で閉会となった。

### 報告事項

(1) 2022 年度事業報告

担当の各委員長、領域代表またはその代理として山田和芳庶務委員長から報告が行われた (総会議事録の資料 1 参照)。

(2) 2022 年度会計決算報告・会計監査報告

堀 和明会計委員長から、2022 年度会計決算報告の説明が行われた (総会議事録の資料 2 参照)。また、2021-2022 年度会計監査の三浦英樹・横山祐典両会員からの会計監査報告を山田和芳庶務委員長が代読した (総会議事録の資料 3)。

(3) 日本第四紀学会ロゴマーク使用規程の設置

北村晃寿副会長から、学会ホームページ上で公開されているロゴマーク使用規程について報告された。

(4) 2023 年大会の若手・学生発表賞の選考スケジュール

池原 実行事委員長から、第 1 回通信執行部会の承認事項として、2023 年大会での選考スケジュールについて報告された。

(5) 日本学術会議 INQUA 小委員会報告

鈴木毅彦会長から、INQUA 第 21 回ローマ大会へは、日本学術会議の代表派遣として小口会員が派遣され、横山副代表も参加したことが報告された。また、日本学術会議 INQUA 小委員会が 2023 年 10 月からの第 26 期においても引き続き設置されることの報告があった (総会議事録の資料 4 参照)。

(6) その他

鈴木毅彦会長から、INQUA 第 21 回ローマ大会の開催内容についての説明がなされた (総会議事録の資料 5 参照)。小野 昭名誉会員が INQUA 終身名誉会員として承認されたことの報告が行われた。

### 審議事項

(1) 2023 年度事業計画

各担当委員長、領域代表またはその代理の評議員から説明があり、総会に諮ることで承認された (総会議事録の資料 6 参照)。

(2) 2023 年度予算案

堀 和明会計委員長から、予算案が示され、特に学会ホームページ改修費、会員マイページ関連費用、INQUA 対策積立金などの説明があり、総会に諮ることで承認された (総会議事録の資料 7 参照)。

(3) 顕彰規程および論文賞・奨励賞選考に関する内規改正の提案 (資料 A、B)

山田和芳庶務委員長から、2022 年 8 月に顕彰規程等に関する検討委員会からの答申を受けて、論文賞の非会員著者の取扱い、および若手・学生発表賞についての規程および内規の改正案が提出された。水野評議員による補足説明を行った上で、審議し、承認された。

(4) 2024 年大会

2024 年大会を宮城県仙台市の東北大学で開催することとし、大会実行委員長を堀 和明会員が務めることで承認された。

### 確認事項

総会資料の確認を行った。

以上

## 日本第四紀学会 顕彰規程 新旧対照表

新	旧	備考欄
<p>[目的]</p> <p>第1条 本規程は日本第四紀学会会則第3条3項に基づき、第四紀学の発展に貢献する優れた業績をあげた会員等に授与される各賞に係わる事項を定める。</p> <p>[賞の名称]</p> <p>第2条 本学会に、日本第四紀学会学術賞、日本第四紀学会若手学術賞、日本第四紀学会論文賞、日本第四紀学会奨励賞、日本第四紀学会若手・学生発表賞、日本第四紀学会功労賞を設ける。</p> <p>[授賞の対象]</p> <p>第3条 日本第四紀学会学術賞（以下「学会賞」と略す）は、第四紀学の発展に貢献した顕著な業績や活動、及び学会活動に貢献した正会員に授与し、学会における最高の賞とする。</p> <p>第4条 日本第四紀学会学術賞（以下「学術賞」と略す）は、第四紀学に貢献した優れた学術業績をあげた正会員に授与する。</p> <p>第5条 日本第四紀学会若手学術賞（以下「若手学術賞」と略す）は、国際誌等における研究発表を通じて第四紀学の発展に貢献する優れた論文を発表した若手会員に授与する。</p> <p>2. 若手学術賞の受賞候補者は、選考が行われる当該年の4月1日時点で39歳以下の正会員とする。</p> <p>第6条 日本第四紀学会論文賞（以下「論文賞」と略す）は、会誌「第四紀研究」に掲載された第四紀学の発展や進歩に貢献する優れた論文を発表した会員である著者に授与する。</p>	<p>[目的]</p> <p>第1条 本規程は日本第四紀学会会則第3条3項に基づき、第四紀学の発展に貢献する優れた業績をあげた会員等に授与される各賞に係わる事項を定める。</p> <p>[賞の名称]</p> <p>第2条 本学会に、日本第四紀学会学術賞、日本第四紀学会学術賞、日本第四紀学会若手学術賞、日本第四紀学会論文賞、日本第四紀学会奨励賞、日本第四紀学会若手・学生発表賞、日本第四紀学会功労賞を設ける。</p> <p>[授賞の対象]</p> <p>第3条 日本第四紀学会学術賞（以下「学会賞」と略す）は、第四紀学の発展に貢献した顕著な業績や活動、及び学会活動に貢献した正会員に授与し、学会における最高の賞とする。</p> <p>第4条 日本第四紀学会学術賞（以下「学術賞」と略す）は、第四紀学に貢献した優れた学術業績をあげた正会員に授与する。</p> <p>第5条 日本第四紀学会若手学術賞（以下「若手学術賞」と略す）は、国際誌等における研究発表を通じて第四紀学の発展に貢献する優れた論文を発表した若手会員に授与する。</p> <p>2. 若手学術賞の受賞候補者は、選考が行われる当該年の4月1日時点で39歳以下の正会員とする。</p> <p>第6条 日本第四紀学会論文賞（以下「論文賞」と略す）は、会誌「第四紀研究」に掲載された第四紀学の発展や進歩に貢献する優れた論文を発表した会員である著者に授与する。</p>	<p>(修正)</p>



日本第四紀学会 顕彰規程 新旧対照表

新	旧	備考欄
<p>第7条 日本第四紀学会奨励賞（以下「奨励賞」と略す）は、会誌「第四紀研究」に掲載された第四紀学の発展や進歩に貢献する優れた論文を発表した若手会員である著者に授与し、若手研究者の育成と研究奨励に寄与することを目的とする。</p> <p>2. 奨励賞の受賞候補者は、選考が行われる当該年の4月1日時点で35歳以下の正会員とする。</p> <p>第8条 日本第四紀学会若手・学生発表賞（以下「若手・学生発表賞」と略す）は、大会で優秀な発表を行った若手会員および学生会員に授与し、若手研究者・学生会員の育成と研究奨励に寄与することを目的とする。</p> <p>2. 若手・学生発表賞の受賞候補者は、選考が行われる大会開催年の8月1日時点で35歳以下または学生の正会員とする。</p> <p>第9条 日本第四紀学会功労賞（以下「功労賞」と略す）は、第四紀学および日本第四紀学会に対して多大な貢献のあった個人、団体、組織に授与される。</p> <p>[受賞候補者の推薦]</p> <p>第10条 本会の会員および領域は、学会賞、学術賞、若手学術賞、論文賞、奨励賞の受賞候補者を推薦することができる。</p> <p>[選考委員会]</p> <p>第11条 学会賞、学術賞及び若手学術賞の受賞候補者を選考するため、各年度に「学会賞選考委員会」を設置する。</p> <p>第12条 論文賞及び奨励賞の受賞候補者を選考するため、各年度に「論文賞選考委員会」を設置する。</p>	<p>第7条 日本第四紀学会奨励賞（以下「奨励賞」と略す）は、会誌「第四紀研究」に掲載された第四紀学の発展や進歩に貢献する優れた論文を発表した若手会員である著者に授与し、若手研究者の育成と研究奨励に寄与することを目的とする。</p> <p>2. 奨励賞の受賞候補者は、選考が行われる当該年の4月1日時点で35歳以下の正会員とする。</p> <p>第8条 日本第四紀学会若手・学生発表賞（以下「若手・学生発表賞」と略す）は、大会で優秀な発表を行った若手会員および学生会員に授与し、若手研究者・学生会員の育成と研究奨励に寄与することを目的とする。</p> <p>2. 若手・学生賞の受賞候補者は、選考が行われる大会開催年の8月1日時点で35歳以下または学生の正会員とする。</p> <p>第9条 日本第四紀学会功労賞（以下「功労賞」と略す）は、第四紀学および日本第四紀学会に対して多大な貢献のあった個人、団体、組織に授与される。</p> <p>[受賞候補者の推薦]</p> <p>第10条 本会の会員および領域は、学会賞、学術賞、若手学術賞、論文賞、奨励賞の受賞候補者を推薦することができる。</p> <p>[選考委員会]</p> <p>第11条 学会賞、学術賞及び若手学術賞の受賞候補者を選考するため、各年度に「学会賞選考委員会」を設置する。</p> <p>第12条 論文賞及び奨励賞の受賞候補者を選考するため、各年度に「論文賞選考委員会」を設置する。</p>	<p>(修正)</p>

2023年8月31日  
日本第四紀学会

日本第四紀学会 顕彰規程 新旧対照表

新	旧	備考欄
<p>第13条 若手・学生発表賞の受賞者を選考するため、大会ごとに「発表賞選考委員会」を設置する。</p> <p>第14条 功労賞受賞者の選考は、別に定められた「名誉会員候補者選考委員会」がこれを行う。</p> <p>[委員会の構成]</p> <p>第15条 学会賞選考委員会は、会長を委員長とし、委員は前会長および会長・前会長が所属する領域以外の各領域から推薦された各1名の委員で構成され、評議員会によって承認される。委員については評議員経験者もしくは学会賞・学術賞の受賞者が望ましい。</p> <p>2. 各領域から推薦された委員の中から副委員長を選出する。副委員長は会合開催の準備、議事録の作成を行う。</p> <p>第16条 論文賞選考委員会は、評議員の中から選出された委員長と、委員長が所属する領域以外の各領域から推薦された各1名で構成され、評議員会によって承認される。委員に欠員が生じた場合は、欠員が生じた領域から新たな委員を補充する。</p> <p>2. 各領域から推薦された委員の中から副委員長を選出する。副委員長は会合開催の準備、議事録の作成を行う。</p> <p>第17条 発表賞選考委員会は、各領域から推薦された各1名の委員で構成され、執行部会によって承認される。</p> <p>[委員の任期]</p> <p>第18条 学会賞選考委員の任期は、選出された時点から総会において選考結果が報告されるまで選考年度内とするが、再任を妨げない。</p> <p>第19条 論文賞選考委員会の委員長は1年とする。委員の任期</p>	<p>第13条 若手・学生発表賞の受賞者を選考するため、大会ごとに「発表賞選考委員会」を設置する。</p> <p>第14条 功労賞受賞者の選考は、別に定められた「名誉会員候補者選考委員会」がこれを行う。</p> <p>[委員会の構成]</p> <p>第15条 学会賞選考委員会は、会長を委員長とし、委員は前会長および会長・前会長が所属する領域以外の各領域から推薦された各1名の委員で構成され、評議員会によって承認される。委員については評議員経験者もしくは学会賞・学術賞の受賞者が望ましい。</p> <p>2. 各領域から推薦された委員の中から副委員長を選出する。副委員長は会合開催の準備、議事録を作成する。</p> <p>第16条 論文賞選考委員会は、評議員の中から選出された委員長と、委員長が所属する領域以外の各領域から推薦された各1名で構成され、評議員会によって承認される。委員に欠員が生じた場合は、欠員が生じた領域から新たな委員を補充する。</p> <p>2. 各領域から推薦された委員の中から副委員長を選出する。副委員長は会合開催の準備、議事録をする。</p> <p>第17条 発表賞選考委員会は、各領域から推薦された各1名の委員で構成され、執行部会によって承認される。</p> <p>[委員の任期]</p> <p>第18条 学会賞選考委員の任期は、選出された時点から総会において選考結果が報告されるまでとするが、再任を妨げない。</p> <p>第19条 論文賞選考委員会の委員長は1年とする。委員の任期</p>	<p>(修正)</p> <p>(修正)</p> <p>(修正)</p>

日本第四紀学会 顕彰規程 新旧対照表

新	旧	備考欄
<p>は、選出された時点から総会において受賞者が報告されるまで選考年度内とし、2期続けて就任することはできない。</p> <p>第20条 発表賞選考委員会の委員長および委員の任期は、選出された時点から選考結果が報告されるまでとするが、再任を妨げない。</p> <p>[受賞候補者の選考]</p> <p>第21条 学会賞選考委員会及び論文賞選考委員会は、執行部会が指定する期日までに届いた自薦と他薦の中から受賞候補者の選考を行ない、その結果を執行部会に報告する。</p> <p>第22条 選考に必要な資料は選考委員会から要請があった場合には庶務委員会が準備する。</p> <p>[受賞者の決定]</p> <p>第23条 評議員会は、学会賞選考委員会および論文賞選考委員会からの啓申をもとに、受賞者を決定する。</p> <p>第24条 発表賞選考委員会は、若手・学生発表賞の受賞者を選考し、執行部会が受賞者を決定する。</p> <p>[選考結果の報告]</p> <p>第25条 学会賞選考委員会および論文賞選考委員会の委員長は、総会において、受賞者の選考経過と結果を報告する。</p> <p>2. 執行部会会長は、受賞者と受賞理由を総会および「第四紀通信」を通じて会員に報告する。</p> <p>[授賞]</p>	<p>は、選出された時点から総会において受賞者が報告されるまでとし、2期続けて就任することはできない。</p> <p>第20条 発表賞選考委員会の委員長および委員の任期は、選出された時点から選考結果が報告されるまでとするが、再任を妨げない。</p> <p>[受賞候補者の選考]</p> <p>第21条 学会賞選考委員会及び論文賞選考委員会は、執行部会が指定する期日までに届いた自薦と他薦の中から受賞候補者の選考を行ない、その結果を執行部会に報告する。</p> <p>第22条 選考に必要な資料は選考委員会から要請があった場合には庶務委員会が準備する。</p> <p>[受賞者の決定]</p> <p>第23条 評議員会は、学会賞選考委員会および論文賞選考委員会からの啓申をもとに、受賞者を決定する。</p> <p>第24条 発表賞選考委員会は、若手・学生発表賞の受賞者を選考し、執行部会が受賞者を決定する。</p> <p>[選考結果の報告]</p> <p>第25条 学会賞選考委員会および論文賞選考委員会の委員長は、総会において、受賞者の選考経過と結果を報告する。</p> <p>2. 執行部会会長は、受賞者と受賞理由を「第四紀通信」を通じて会員に報告する。</p> <p>[授賞]</p>	<p>(修正)</p> <p>(削除)</p> <p>(修正)</p>

2023年8月31日  
日本第四紀学会

日本第四紀学会 顕彰規程 新旧対照表

新	旧	備考欄
<p>第26条 学会賞, 学術賞, 若手学術賞, 論文賞, 奨励賞および功労賞の授賞式は総会にあわせて行い, 賞状を授与する.</p> <p>2. 若手学術賞および奨励賞の受賞者には, 副賞を授与する.</p> <p>第27条 若手・学生発表賞の受賞者には, 賞状を授与する.</p> <p>[その他]</p> <p>第28条 本規程に定めるもののほか, 各賞の選考に係わる必要事項は内規に定める.</p> <p>[規程の変更]</p> <p>第29条 本規程の変更には, 評議員会の承認を必要とする.</p> <p>付則1 本規程は, 2023年8月31日から施行する.</p>	<p>第26条 学会賞, 学術賞, 若手学術賞, 論文賞, 奨励賞および功労賞の授賞式は総会にあわせて行い, 賞状を授与する.</p> <p>2. 若手学術賞および奨励賞の受賞者には, 副賞を授与する.</p> <p>第27条 若手・学生発表賞の受賞者には, 賞状を授与する.</p> <p>[その他]</p> <p>第28条 本規程に定めるもののほか, 各賞の選考に係わる必要事項は内規に定める.</p> <p>[規程の変更]</p> <p>第29条 本規程の変更には, 評議員会の承認を必要とする.</p> <p>付則 本規程は, 2023年3月22日から施行する.</p>	

## 日本第四紀学会 論文賞・奨励賞選考に関する内規 新旧対照表

新	旧	備考欄
<p>[授賞の対象]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 選考の対象は、授与年の前々年及び前年の2年間(2巻分)の第四紀研究に発表された論文(論説, 短報, 総説, 資料, 講座など)とする。ただし、編集委員会が非会員や学会賞・学術賞受賞者へ依頼した論文は対象外とする。</li> <li>2. 奨励賞の受賞候補者は、選考が行われる当該年の4月1日時点で35歳以下の正会員とする。ただし、すでに奨励賞を受賞したことのある筆頭著者の論文は、奨励賞の対象とならない。</li> <li>3. 論文賞と奨励賞の授与は原則として毎年とし、受賞論文数は論文賞が1-2編程度、奨励賞が2編程度とする。</li> <li>4. 論文賞受賞論文が複数の著者(研究グループ等を含む)により執筆されたものである場合には、会員の執筆者一同に論文賞を授与する。奨励賞については会員である筆頭著者に授与する。</li> </ol> <p>[選考委員会]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>5. 委員に欠員が生じた場合は、欠員が生じた領域から新たな委員を補充する。</li> </ol> <p>[受賞候補者の推薦]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>6. 会長は第四紀通信に論文賞と奨励賞の受賞候補者の推薦募集に関する記事を掲載する。</li> <li>7. 受賞候補者の推薦書類は、執行部会が定める期日までに日本第四紀学会論文賞選考委員会宛てに提出する。</li> <li>8. 受賞候補者の推薦書類には次の事項を記入する。</li> </ol>	<p>[授賞の対象]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 選考の対象は、授与年の前々年及び前年の2年間(2巻分)の第四紀研究に発表された論文(論説, 短報, 総説, 資料, 講座など)とする。</li> <li>2. 奨励賞の受賞候補者は、選考が行われる当該年の4月1日時点で35歳以下の正会員とする。ただし、すでに奨励賞を受賞したことのある筆頭著者の論文は、奨励賞の対象とならない。</li> <li>3. 論文賞と奨励賞の授与は原則として毎年とし、受賞論文数は論文賞が1-2編程度、奨励賞が2編程度とする。</li> <li>4. 論文賞受賞論文が複数の著者(研究グループ等を含む)により執筆されたものである場合には、会員の執筆者一同に論文賞を授与する。奨励賞については会員である筆頭著者に授与する。</li> </ol> <p>[選考委員会]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>5. 委員に欠員が生じた場合は、欠員が生じた領域から新たな委員を補充する。</li> </ol> <p>[受賞候補者の推薦]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>6. 会長は第四紀通信に論文賞と奨励賞の受賞候補者の推薦募集に関する記事を掲載する。</li> <li>7. 受賞候補者の推薦書類は、執行部会が定める期日までに日本第四紀学会論文賞選考委員会宛てに提出する。</li> <li>8. 受賞候補者の推薦書類には次の事項を記入する。</li> </ol>	<p>(修正)</p> <p>(修正)</p> <p>(修正)</p>

2023年8月31日  
日本第四紀学会

日本第四紀学会 論文賞・奨励賞選考に関する内規 新旧対照表

新	旧	備考欄
<p>(1) 賞の名称</p> <p>(2) 推薦者名 (自薦を含む)</p> <p>(3) 受賞候補者名・所属 (奨励賞の場合には生年月日)</p> <p>(4) 受賞候補論文題目及び巻号頁</p> <p>(5) 推薦理由 (1000 字以内)</p> <p>(6) 推薦者・受賞候補者の連絡先 (住所, 電話番号, メールアドレス)</p> <p>レス)</p> <p>[<del>選考対象</del>受賞候補者の選出]</p> <p>9. 会員からの候補者・候補論文の推薦の状況をみて、<del>選考対象</del>受賞候補となる論文を選考委員会が独自に調査することができる。また、<del>編集委員会</del>に対し、推薦を依頼することができる。</p> <p>[選考作業]</p> <p>10. 論文賞と奨励賞の選考に当たっては、論文の獨創性、将来の発展性、総合性や重要な発見などを選考の基準とする。</p> <p>11. 選考作業は、原則として電子メールあるいはオンラインシステム等を通じて行う。委員長が必要と判断する場合には、<u>対面による</u>会合を開催することができる。</p> <p><del>12. 選考委員会は、必要に応じて、編集委員会から意見を聴取すること</del> <del>ができる。</del></p> <p>12. 選考委員会の委員が受賞候補者となった場合及び受賞候補者と利益相反の関係にある<u>会員が受賞候補者</u>となった場合には、当該委員はその論文の選考に関与しないこととする。</p>	<p>(1) 賞の名称</p> <p>(2) 推薦者名 (自薦を含む)</p> <p>(3) 受賞候補者名・所属 (奨励賞の場合には生年月日)</p> <p>(4) 受賞候補論文題目及び巻号頁</p> <p>(5) 推薦理由 (1000 字以内)</p> <p>(6) 推薦者・受賞候補者の連絡先 (住所, 電話番号, メールアドレス)</p> <p>レス)</p> <p>[選考対象の選出]</p> <p>9. 会員からの候補者・候補論文の推薦の状況をみて、選考対象となる論文を選考委員会が独自に調査することができる。また、<u>編集委員会</u>に対し、推薦を依頼することができる。</p> <p>[選考作業]</p> <p>10. 論文賞と奨励賞の選考に当たっては、論文の獨創性、将来の発展性、総合性や重要な発見などを選考の基準とする。</p> <p>11. 選考作業は、原則として電子メール等を通じて行う。委員長が必要と判断する場合には、<u>会合を開催</u>することができる。</p> <p>12. 選考委員会は、必要に応じて、<u>編集委員会</u>から意見を聴取することができる。</p> <p>13. 選考委員会の委員が受賞候補者となった場合及び受賞候補者と利益相反の関係にある<u>会員が受賞候補者</u>となった場合には、当該委員はその論文の選考に関与しないこととする。</p>	<p>(修正)</p> <p>(修正)</p> <p>(修正)</p> <p>(削除)</p> <p>(修正)</p>

2023年8月31日  
日本第四紀学会

日本第四紀学会 論文賞・奨励賞選考に関する内規 新旧対照表

新	旧	備考欄
<p>14- 13. 同一論文が、論文賞と奨励賞を受賞することができる。</p> <p>[選考結果の報告]</p> <p>14- 14. 執行部会が定める期日までに届いた自薦と他薦及び評議員から推薦された候補者および選考委員会が独自に推薦する候補者の中から受賞候補者を選考し、会長に答申する。また、論文賞選考委員長は、評議員会と総会において、選考経過と結果を報告する。</p> <p>14- 15. 執行部会会長は、受賞者と受賞理由を総会および「第四紀通信」を通じて会員に報告する。</p> <p>[その他]</p> <p>14- 16. 本内規の変更には、評議員会の承認を必要とする。</p> <p>14- 17. 本内規は、2023年8月31日から施行する。</p>	<p>14. 同一論文が、論文賞と奨励賞を受賞することができる。</p> <p>[選考結果の報告]</p> <p>15. 執行部会が定める期日までに届いた自薦と他薦及び評議員から推薦された候補者から受賞候補者を選考し、会長に答申する。また、論文賞選考委員長は、評議員会と総会において、選考経過と結果を報告する。</p> <p>16. 執行部会は、受賞者と受賞理由を「第四紀通信」を通じて会員に報告する。</p> <p>[その他]</p> <p>17. 本内規の変更には、評議員会の承認を必要とする。</p> <p>18. 本内規は、2020年9月9日から施行する。</p>	<p>(修正)</p> <p>(修正)</p> <p>数字の繰り上がりあり。</p>

## ◆日本第四紀学会 2023 年総会議事録

日 時：2023 年 9 月 2 日（土）15:15～17:00（授賞式を含む）

場 所：早稲田大学所沢キャンパスでの対面と Zoom システムを用いたオンラインによるハイブリッド会議

司会の池原 実行事委員長による開会の辞、鈴木毅彦会長、山田和芳大会実行委員長の挨拶が続き、定足数の確認（委任状を含め正会員数の 10 分の 1 以上の出席が必要）が行われ、総会成立条件を満たしていることが山田和芳庶務委員長より報告された（最終的な参加者数は、会場参加正会員 57 名、オンライン参加正会員 3 名、委任状 120 通：すべて議長委任）。議長に兵頭政幸会員を選出し、下記の議事が進められた。総会に引き続いて、授賞式が前杵英明・西澤文勝両庶務委員の担当でとり行われた。

### 報告事項

#### (1) 2022 年度事業報告

資料 1 に基づき、山田庶務委員長が説明を行った。

#### (2) 2022 年度会計決算報告・会計監査報告

堀 和明会計委員長から資料 2 に基づき、会計決算報告が行われた。また、2021-2022 年度会計監査の三浦英樹会員・横山祐典会員から資料 3 に基づき会計監査報告が行われた（報告は横山会員）。

#### (3) 2022 年学会賞・学術賞・若手学術賞受賞者選考報告

#### (4) 2022 年論文賞・奨励賞受賞者・受賞論文選考報告

各選考報告資料は、「第四紀通信」30 巻 3 号掲載と同じ内容であり、各賞の受賞者名が山田庶務委員長から報告された。

#### (5) 日本第四紀学会ロゴマーク使用規程の設置

山田庶務委員長が説明を行った。規程については「第四紀通信」30 巻 3 号にて掲載している。

#### (6) 特別委員会オンライン委員会の 2023-2024 年度継続について

山田庶務委員長が説明を行った。

#### (7) 第 21 回国際第四紀学連合大会 INQUA2023 ローマ大会報告

資料 4 に基づき、鈴木毅彦会長から、大会参加者数や次回大会開催場所や時期についての説明がなされた。また、小野 昭名誉会員が、INQUA 終身名誉会員として承認されたことが写真付きで報告された。

#### (8) 日本学術会議 INQUA 小委員会報告

資料 5 に基づき、齋藤文紀委員長から、日本学術会議 INQUA 小委員会についての活動報告がなされた。本年 10 月から始まる第 26 期（2023 年 10 月～2026 年 9 月）についても引き続き委員会は設置されること、次期委員については現在調整打診中であることが報告された。

#### (9) 2023 年度第 1・2 回評議員会、第 1 回通信評議員会審議事項報告

7 月 2 日（日）にオンラインで開催された第 1 回評議員会、8 月 31 日（金）にハイブリッド形式にて開催された第 2 回評議員会、8 月 11 日～18 日に電子メールを用いた方法で開催された第 1 回通信評議員会での審議事項が山田庶務委員長によって簡単に報告された。

### 審議事項

#### (1) 2022 年度事業報告

資料 1 の 2022 年度事業報告は承認された。

#### (2) 2022 年度会計決算報告・会計監査報告

資料 2、3 に基づき会計決算報告・会計監査報告は承認された。

#### (3) 2023 年度事業計画

資料 6 に基づき、会計委員会については堀会計委員長、その他については山田庶務委員長が説明を行い、承認された。

#### (4) 2023 年度予算案

資料 7 に基づき、堀会計委員長が説明を行い、承認された。

資料 8 2023-2024 年度役員・委員会委員等一覧  
以上

### 【総会資料 1】2022 年度事業報告

#### 1-1 庶務委員会（委員長：山田和芳）

(1) 総会、評議員会（5 回）、執行部会（5 回）を開催した。

(2) 入退会の申し出への対応を行い、会員名簿の管理を行った。2022 会計年度末（2023 年 6 月 30 日）

時点での会員数は以下の通りである

正会員 886 名（うち学生会費適用者 12 名）、賛助会員 9 社、名誉会員 19 名。

逝去会員：吉田栄夫会員、池田明彦会員、小泉明裕会員、菊地隆男名誉会員



- (3) 若手・学生発表賞受賞者選考、学会賞・学術賞・若手学術賞受賞者選考、論文賞・奨励賞受賞者選考に関する業務を行った。
- (4) 転載許可申請に関する業務を行った(8件承認)。
- (5) シンポジウム等の共催・後援に関連する業務を行った(共催2件、後援5件)
- (6) 法務委員会規程を改訂し、常任委員の補充を行った。
- (7) 選挙管理委員会を立ち上げ、2023-2024年度役員選挙を行った。
- (8) 顕彰規程等に関する検討委員会の答申をうけて、顕彰規程等の見直しを順次進めた。
- (9) 受け入れ図書・資料の整理を行った。
- (10) その他、学会活動に関する庶務業務を行った。

### 1-2 会計委員会 (委員長：堀 和明)

- (1) 会計に関する承認業務を行った。
- (2) 2022年総会において、2021年度の収支決算を報告し、2022年度の予算案を提案した。
- (3) 2021年度決算に対し会計監査を受けた。
- (4) 2023年度の予算原案を作成した。
- (5) 会則を改正して、会計年度の切り替え時期を6月30日/7月1日とすることとした。それにあわせて会計に関する手続き時期の前倒しを進めた。
- (6) 「寄付金の取扱い等に関する内規」を作成した。
- (7) 会費のオンライン決済システムの構築を進めた。
- (8) INQUA ローマ大会若手派遣支援に対して、2名に支援金を支払うこととした。

### 1-3 編集委員会 (委員長：苅谷愛彦)

- (1) 第四紀研究第61巻3号(論説1編、短報1編、書評1編)、4号(論説1編、短報1編、書評1編)を刊行した。第61巻の総頁数は159頁である。また第62巻1号(受賞記念論文1編、書評1編)、2号(受賞論文1編、短報1編)、3号(受賞論文1編、論説2編、総説1編)を刊行した。受理済み論文については、順次J-STAGEおよびJ-STAGE dataで早期公開を行った。
- (2) 2021年大阪大会シンポジウム特集号(井上淳委員長)および2021年福岡シンポジウム特集号(奥野 充委員長)の編集を進めた。
- (3) 編集委員会(通常号)をオンライン及びメール審議形式で12回開催した。
- (4) 第四紀研究第61巻3号から表紙・背表紙に「書評(Book review)」見出しを掲載することにした。
- (5) 執筆要項と投稿用送り状を部分修正した。
- (6) 第四紀研究(冊子体および電子ジャーナル)に関連して、①製版・印刷・諸経費など、②別刷単価の価格改定を行った。
- (7) 電子投稿の増加などに対応した編集作業手順

の変更に伴い、投稿規定を一部改訂した。

- (8) 編集書記用の古いパソコンについて、専門業者に物理破壊を依頼し、廃棄手続きを済ませた。

### 1-4 広報委員会 (委員長：那須浩郎)

- (1) 「第四紀通信」の編集および学会ホームページ、メーリングリストの維持管理を行った。
- (2) 「第四紀通信」第29巻5、6号、第30巻1、2号を編集し、発行した。なお、2023年から「第四紀通信」の発行を「第四紀研究」と同時発送とし、2、5、8、11月に発行することとなった。
- (3) 「第四紀通信」各号の電子版(PDF版)を、それぞれ発行前月の下旬に日本第四紀学会ホームページに掲載した。
- (4) 日本第四紀学会ホームページを通じて広報、情報提供等を行った。
- (5) 日本第四紀学会会員メーリングリストを通じて広報、情報提供等を行った。2022年度の配信件数は2023年7月31日時点で140件(#1481～1620)。会員メーリングリストを悪用したスパムメールが一部会員に配信されたことを受け、配信方式を変更した
- (6) 各委員会および各領域のメーリングリストの管理を行った。

### 1-5 行事委員会 (委員長：池原 実)

- (1) 日本第四紀学会2022年大会を2022年8月26日(金)～28日(日)に静岡県地震防災センター(静岡市)において対面方式で開催した(大会実行委員長：北村晃寿会員、実行委員：中西利典会員、西岡佑一郎会員)。参加者は3日間で総数82名であった。26、27日の一般研究発表は、口頭発表28件、ポスター発表10件であった。また、27日午後には総会と授賞式が対面とオンラインのハイブリッド方式で行われた。28日午前にはシンポジウム「伊豆衝突帯とその隣接地域における大規模自然災害」が開催され、4件の講演があった。また28日午後には2つの巡検(Aコース：ふじのくに地球環境史ミュージアム、Bコース：熱海市伊豆山地区土砂災害)が行われた。
- (2) 2022年日本第四紀学会学会賞・学術賞受賞記念講演会を2023年2月18日(土)9:30～12:30にオンラインで開催した。事前登録者は165名、当日の参加者は101名だった。講演は、学会賞受賞者の池原 研会員による「巨大地震時に海底で起こること、そしてその地層記録と新たなチャレンジ」、学術賞受賞者の須貝俊彦会員による「湿潤変動帯島弧の山地・河川・平野の地形発達史研究一回顧と展望」、学術賞受賞者の澤井祐紀会員による「地層の記録が明らかにする過去の巨大地震・

津波」であった。

(3) 2023年大会を2023年8月31日(木)～9月4日(月)に早稲田大学所沢キャンパスを会場として開催する予定で準備を進めている(大会実行委員長:山田和芳会員、実行委員:久保純子会員、納谷友規会員、工藤雄一郎会員ほか)。プレ巡検は8月31日、一般研究発表は9月1日・2日、総会、懇親会は9月2日、シンポジウム(都市環境～ウェルビーイングな社会創出のための第四紀研究)、普及講演会(鈴木毅彦会長)、アウトリーチ巡検は9月3日、専門巡検(入間川沿いの下部更新統仏子層の観察)は9月4日を予定している。大会参加費用の取扱いについて、事前決済サービスを導入することにした。

(4) 2024年大会の開催地候補として宮城県仙台市で実施が可能か、検討を進めた。

#### 1-6 渉外委員会 (委員長:白井正明)

(1) 日本地球惑星科学連合(JpGU)2023年大会(5月21日～26日:ハイブリッド形式)のセッションとして『第四紀:ヒトと環境系の時系列ダイナミクス』、『活断層と古地震』を単独及び共同提案主催し、そのほか4つのセッションを共同提案した。また、2022年11月29日の学協会会議に参加した。

(2) 防災学術連携体が主催する2022年10月22日(土)に開催された第14回防災学術連携シンポジウム・ぼうさいこくたい2022「自然災害を取り巻く環境の変化—防災科学の果たす役割」の第2部特別シンポジウムにおいて、北村晃寿副会長が日本第四紀学会を代表して、日本古生物学会と共同提案する形で「熱海の盛土崩壊の原因に関する地球科学的研究」と題した講演を行った。2023年4月11日(火)にシンポジウム「気候変動がもたらす災害対策・防災研究の新展開」が開催された。「関東大震災100年企画冊子」へ小荒井 衛会員が執筆することになった。

(3) 自然史学会連合の総会(2022年度:2022年12月4日、オンライン、2023年度:2023年6月4日、オンライン)に参加した。

#### 1-7 領域1「気候変動及び海洋の諸プロセス」(領域代表:横山祐典)

(1) The Anthropocene Review に投稿した別府湾サイトのGSSP審査用論文が2022年10月7日に受理された。その後、Anthropocene Working Group内で審査、投票が行われた。

(2) 2023年3月2日(木)に東京大学大気海洋研究所主催で実施された共同利用研究集会「古気候研究におけるプロキシとモデルの融合:温暖期

の気候変動」を領域1の共催とした。

#### 1-8 領域2「陸上の諸プロセス」(領域代表:吾妻崇)

(1) 2023年3月25日(土)・26日(日)に福岡大学で開催された国際火山噴火情報研究集会EHAI2022-2を後援した。

(2) 2023年6月24日(土)・25日(日)に大阪公立大学中百舌鳥キャンパスで開催された国際火山噴火情報研究集会EHAI2023-1を後援した。

#### 1-9 領域3「層序と年代基準」(領域代表:里口保文)

(1) 継続案件のシンポジウムの企画・開催に向けた検討を行った。

#### 1-10 領域4「人類と生物圏」(領域代表:海部陽介)

(1) 2022年11月26日(土)に大阪公立大学杉本キャンパスで開催されたミニシンポジウム「日本の山火事・野火研究:地質時代から現在まで」を後援し、井上 淳会員が組織委員・演者として参加し、3名の学会員が講演した。

(2) 2023年3月5日(日)10:00～17:00に、オンライン公開シンポジウム「縄文時代早期人とその生態—群馬県居家以岩陰遺跡を中心に—」を主催した。工藤雄一郎会員らが世話人となり、4名の学会員が講演とパネルディスカッションに登壇した。

#### 1-11 領域5「現代社会に関わる第四紀学」(領域代表:小荒井 衛)

(1) 「第四紀とは」の改訂版パンフレットの作成作業を開始した。

(2) 阿蘇ユネスコグローバルジオパークの協力を得て、シンポジウム「活断層の保存とその活用」を開催予定である。

#### 1-12 オンライン委員会(特別委員会、委員長:久保田好美、委員長代理:目代邦康)

オンラインによる会議・講演会などの運営や会員サービスのIT化等の推進を支援するため、2021-2022年度に限定して、オンライン委員会を設置されたが、引き続き2023-2024年度も設置することが2023年度第1回評議員会にて決定された。

(1) 2022-2023年度の学会行事等をweb上のカレンダーを作成してアップした。

(2) Zoomの利用手順について整理し、マニュアル化した。

(3) 委員会での情報共有がスムーズになるよう、委員会メンバー限定アクセスサイトの構築を行った。

【総会資料 2】 2022 年度会計決算報告

日本第四紀学会

2022年度収支会計報告  
(2022年8月1日～2023年6月30日現在)

収入の部 (単位: 円)

科 目	予 算 額 ①	6月30日現在②	増 減 ② - ①	執 行 率 ② / ①	摘 要
会費収入	8,328,000	8,757,000	429,000	105.2%	正会員886名、学生会員12名、賛助9社 (2023年6月30日時点)
正会員会費収入	8,128,000	8,557,000	429,000	105.3%	通常会員会費 8,397,000円 学生会員会費 80,000円 海外会員会費 80,000円
賛助会員会費収入	200,000	200,000	0	100.0%	20,000円×9社(10口)
誌代	600,000	385,023	-214,977	64.2%	定期雑誌購入、Back No
別刷代・超過頁代収入	250,000	516,700	266,700	206.7%	61巻3号・4号, 62巻1号・2号 別刷・カラー代等
雑収入	150,000	158,231	8,231	105.5%	JST(科学技術振興機構) 等
利子収入	1,000	138	-862	13.8%	預金利息
広告料収入	0	0	0		2022年大会予稿集広告無しのため
役員選挙積立金取崩収入	200,000	200,000	0	100.0%	2023年度役員改選のため
INQUA対策積立金取崩収入	300,000	300,000	0	100.0%	INQUAローマ大会のため
名簿作成積立金取崩収入	0	0	0		
予備費積立金取崩収入	0	0	0		
収入合計	9,829,000	10,317,092	488,092	105.0%	
前期繰越金	21,205,772	21,205,772	0	100.0%	
合計	31,034,772	31,522,864	488,092	101.6%	

支出の部 (単位: 円)

科 目	予 算 額 ①	6月30日現在②	増 減 ② - ①	執 行 率 ② / ①	摘 要
会誌発行費	3,101,200	2,993,073	-108,127	96.5%	第四紀研究 61巻3号・4号, 62巻1～2号
印刷費	1,500,000	1,595,330	95,330	106.4%	61巻3～4号, 62巻1～2号 (J-STAGE掲載費用) ・ 61巻1～4号J-STAGE早期公開掲載費
編集費	300,000	190,064	-109,936	63.4%	会誌編集費・編集書記用PCデータ消去費
編集人件費	1,201,200	1,101,100	-100,100	91.7%	編集書記手当 (11か月分)
別刷印刷費	100,000	106,579	6,579	106.6%	61巻3～4号, 62巻1～2号
会誌・会報発送費	700,000	593,377	-106,623	84.8%	会誌・通信発送費
会報発行費	785,000	766,828	-18,172	97.7%	第四紀通信 29巻4～6号, 30巻1～2号
印刷費	500,000	482,130	-17,870	96.4%	
編集費	75,000	75,398	398	100.5%	第四紀通信編集費
編集人件費	210,000	209,300	-700	99.7%	第四紀通信編集アルバイト代
学会HP運営費	170,000	80,720	-89,280	47.5%	HP更新アルバイト代, ドメインサービス・レンタルサーバー利用料
大会運営準備金	380,000	380,000	0	100.0%	2023年大会運営準備金
巡検準備金	100,000	100,000	0	100.0%	2023年大会分
講演会・シンポジウム費	50,000	0	-50,000	0.0%	
予稿集印刷費	0	0	0		
学会賞等顕彰費	350,000	173,964	-176,036	49.7%	学会賞等賞状作成費、若手学術賞・奨励賞副賞
会議費	60,000	8,500	-51,500	14.2%	第5回執行部会会場費
通信費	380,000	173,012	-206,988	45.5%	会費請求書発送費、事務通信費等
旅費・交通費	100,000	86,321	-13,679	86.3%	会計監査会・第5回執行部会交通費
印刷費	350,000	349,081	-919	99.7%	学会専用封筒、コピー代等
業務委託費	2,550,000	2,276,165	-273,835	89.3%	事務委託費, 会員マイページ関連費用 (Web決済構築等)
領域活動費	750,000	0	-750,000	0.0%	
領域1	150,000	0	-150,000	0.0%	
領域2	150,000	0	-150,000	0.0%	
領域3	150,000	0	-150,000	0.0%	
領域4	150,000	0	-150,000	0.0%	
領域5	150,000	0	-150,000	0.0%	
INQUA対策費	1,000,000	500,000	-500,000	50.0%	INQUAローマ大会若手支援2名分
役員選挙費	400,000	368,236	-31,764	92.1%	委員会交通費, 選挙会告印刷費, マイページ選挙システム運用費, 発送事務局費用
名簿作成費	-	-	-		
INQUA対策積立金繰入支出	0	0	0		
役員選挙費積立金繰入支出	0	0	0		
名簿作成積立金繰入支出	-	-	-		
予備費積立金繰入支出	0	0	0		
加盟学協会分担金支出	50,000	30,000	-20,000	60.0%	日本地球惑星科学連合, 自然史学会分担金
国際科学技術コンテスト協賛金支出	50,000	50,000	0	100.0%	国際地学オリンピック協賛金
雑費	50,000	15,101	-34,899	30.2%	振込手数料等
予備費	200,000	0	-200,000	0.0%	
支出合計	11,576,200	8,944,378	-2,631,822	77.3%	
次期繰越金	19,458,572	22,578,486	3,119,914	116.0%	
合計	31,034,772	31,522,864	488,092	101.6%	

日本第四紀学会

貸借対照表  
(2023年6月30日現在)

(単位：円)

借 方		貸 方	
科 目	金 額	科 目	金 額
流 動 資 産		流 動 負 債	
郵便振替	4,715,917	前受会費	1,559,000
小口現金	963,917		
普通預金	16,561,520	小 計	1,559,000
現金(事務局)	33,176	正味財産	
未収金	1,862,956	名簿作成積立金	0
固 定 資 産		役員選挙積立金	0
定期預金	10,000,000	INQUA対策積立金	0
		予備費積立金	10,000,000
		次期繰越金	22,578,486
		(前期繰越金	21,205,772)
		(当期収支差額	1,372,714)
		小 計	32,578,486
合 計	34,137,486	合 計	34,137,486

財産目録  
(2023年6月30日現在)

資 産 の 部 (単位：円)

科 目	摘 要	金 額
郵便振替	郵便局(年会費振込専用口座)	4,715,917
小口現金	編集書記手許金	963,917
普通預金	みずほ銀行早稲田支店	16,304,611
	三井住友信託銀行本店営業部	206,909
	りそな銀行新宿支店(Web決済専用口座)	50,000
現金	事務局手持ち金	33,176
未収金	会費WEB決済入金分	1,470,000
	62巻2号別刷超過頁代収入	9,980
	丸善冊子収入	382,976
流動資産合計		24,137,486
定期預金	三井住友信託銀行本店営業部	10,000,000
固定資産合計		10,000,000
合 計		34,137,486

負 債 の 部 (単位：円)

科 目	摘 要	金 額
前受会費	2023年度以降年会費	1,559,000
合 計		1,559,000

正味財産の部 (単位：円)

科 目	摘 要	金 額
名簿作成積立金	名簿作成積立金	0
役員選挙積立金	役員選挙積立金	0
INQUA対策積立金	INQUA対策積立金	0
予備費積立金	予備費積立金	10,000,000
次期繰越金		22,578,486
	前期繰越金	21,205,772
	当期収支差額	1,372,714
合 計		32,578,486

【総会資料3】2022年度会計監査報告

日本第四紀学会

会長 鈴木 毅彦 殿


2022年度会計監査報告書

日本第四紀学会 2022年度収支決算報告書(2022年8月1日～2023年6月30日)の監査を行い、予算の執行、帳簿、証票の整理等、正常適正に処理されていることを確認いたしました。


ここにご報告いたします。

以上

2023年8月8日

会計監査 三浦 美樹 

2023年8月10日

会計監査 横山 祐典 

**【総会資料 4】 第 21 回国際第四紀学連合大会、INQUA2023 ローマ大会報告（委員長 小口 高）**

2023 年 7 月 14 ～ 20 日、イタリア、ローマのサピエンツァ大学において第 21 回国際第四紀学連合大会 INQUA2023 ローマ大会が開催された。最終日における主催者の発表によれば、日本はイタリア、英国、ドイツ、米国、中国、スペイン、フランス、インド、スイス、オーストラリア、ポーランドに次いで 70 名弱が参加した。

国際評議員会へは、日本学術会議の代表派遣として小口 高委員が派遣され、副代表として横山祐典氏が参加した。国際評議員会では次期大会がインドのラクナウで 2027 年 2 月に開催することが決定された。また、2023 ～ 2027 年の役員が以下のとおり決定された。

会長：Laura Sadori（イタリア、副会長から昇任）、会計：Freek Busschers（オランダ、留任）、事務局長：Eniko Magyari（ハンガリー、留任）、副会長：Maria Fernanda Sanchez Goni（フランス、留任）、副会長：Pradeep Srivastava（インド、新任）、副会長：Kathleen Nicoll（米国、新任）、前会長：Thijs Van Kolfshoten（オランダ）

また名誉会員（Honorary Life Fellow）に、小野 昭会員（日本）、Dahe Qin（中国）、Mauro Coltoti（イタリア）、Ravka Amit（イスラエル）、Allan Ashworth（米国）が承認された。

国際評議員会でその他に審議された重要事項として、コミッション体制の変更に関して、現コミッションは基本的に変更なしに継続、ホットになっている分野などを考慮して新たなコミッションを 2025 年までに追加予定である。後者については既存のコミッションのリーダーの意見を聞くこととなっている。

この他、日本第四紀学会として学会報告を第四紀研究に掲載を予定しており、そのためのコミッション、セッション、巡検に関する報告記事を現在募集している（10 月末日締切）。また報告記事は本大会の若手参加支援対象者も執筆予定である。

**【総会資料 5】 日本学術会議 INQUA 小委員会報告（委員長 齋藤文紀）**

日本学術会議 INQUA 小委員会は、地球惑星科学委員会国際連携分科会に属している。2023 年 9 月までの 3 年間で第 25 期であり、10 月からの 3 年間で第 26 期となっている。INQUA に対する日本の代表機関となっており、INQUA の日本の分担金は、日本学術会議から支払われている。今年 7 月に行われた INQUA 第 21 回ローマ大会へは、日本学術会議の代表派遣として小口 高委員が派遣され、副代表として横山祐典氏が参加した。INQUA は、国際学術会議（ISC）のユニオンメンバーとなっており、ISC では他の地球科学関係のユニオン（IUGS、IUGG、IGU など）と Geo-Union の構成メンバーとなっている。日本学術会議の第 26 期においても継続して INQUA 小委員会が設置されることが決まっている。第 26 期の委員長及び委員構成については、日本学術会議の新しい会員と連携会員の任期が始まる 10 月以降に最終決定する予定である。

第 25 期の INQUA 小委員会の活動では、2023 年 6 月 11 日に日本学術会議公開シンポジウム「最終氷期以降の日本列島の気候・環境変動と人類の応答」を、日本第四紀学会の共催を受けてオンラインで開催し、約 550 名が参加した。また INQUA 第 21 回ローマ大会に向けて、日本第四紀学会の小野 昭名誉会員を INQUA 終身名誉会員に推薦し、承認された。また国際評議員会への代表者（主代表：小口 高、副代表：横山祐典）を決定した。

**【総会資料 6】 2023 年度事業計画**

**1-1 庶務委員会**

- (1) 総会・評議員会・執行部会の開催に関連する業務を行う。
- (2) 入会・退会者の確認を行うとともに会員名簿の管理を行う。
- (3) 学会賞・学術賞・若手学術賞の受賞者選考および論文賞・奨励賞の受賞者選考に関する業務を行う。
- (4) 名誉会員候補者選考委員会を立ち上げ、名誉会員および功労賞受賞者選考に関する業務を行う。
- (5) 転載許可申請への対応を行う。

- (6) 学会・シンポジウム等の共催・後援に関連する業務を行う。
- (7) 顕彰規程や転載許可申請書等の改正・見直しに関する業務を行う。各受賞者への記念品、副賞、会員への研究助成などに関するアンケートを実施する。
- (8) 歴代大会実行委員、巡検案内者、講習会講師、INQUA 役員・委員などのリストを整理し、顕彰関係の基本資料に加える。
- (9) 学会資料の電子化、保存方法について検討する。
- (10) 将来における庶務委員会の分割化や書記雇

用について検討する。

- (11) 70周年記念事業等への対応を検討する。
- (12) その他学会活動に関する庶務業務を行う。

### 1-2 会計委員会

- (1) 会計に関する承認業務を行う。
- (2) 2023年度総会において、2022年度の収支決算を報告し、2023年度の予算案を提案する。
- (3) 会計監査を受ける。
- (4) 現状の問題点と長期的な財政事情を考慮し、会計の観点から学会の運営を検討する。
- (5) 在庫物品の管理を行う。学会誌は出版から5年間は20冊を保管し、それ以降は10冊のみを保管する。オンラインで公開されていない要旨集をPDF化し、各号10冊のみを保管する。
- (6) 会議等での旅費（交通費）支給の基準となる内規を作成する。
- (7) 物価高の社会情勢を考え、アルバイト（書記）の時間給単価値上げを検討する。

### 1-3 編集委員会

- (1) 「第四紀研究」第62巻第4号、第63巻第1号、2号を編集し、定期刊行する。また、J-STAGEを通じて電子ジャーナルとしての刊行を行う。必要に応じて、電子付録を学会ホームページとJ-STAGE dataで公開する。
- (2) 「第四紀研究」編集・出版に関わる諸課題を整理し、順次その検討・見直しを進め、可能なものから改善を実施する。
- (3) 論文別刷50部を希望者には無料配布することを検討する。

### 1-4 広報委員会

- (1) 「第四紀通信」第30巻3号、4号、第31巻1号、2号を編集し、発行する。
- (2) 「第四紀通信」各号の電子版（PDF版）を、それぞれ発行前月の下旬に日本第四紀学会ホームページに掲載する。各ファイルを保存し、アーカイブ化を継続する。
- (3) 日本第四紀学会ホームページを管理し、広報、情報提供、アウトリーチ活動等を行う。
- (4) 日本第四紀学会会員メーリングリストを通じて各種情報提供等を行う。
- (5) 各委員会および各領域のメーリングリストの管理を行う。
- (6) 日本第四紀学会ホームページのリニューアルを行う。

### 1-5 行事委員会

- (1) 日本第四紀学会2023年大会を2023年8月31日（木）～9月4日（月）に、早稲田大学所沢キャンパス（埼玉県所沢市）で開催する。
- (2) 2023年大会における若手・学生発表賞の審査

委員会の立ち上げ、審査に関する業務を行う。

- (3) 2024年大会は東北大学で開催し、大会実行委員長を堀 和明会員とし、日程・会場等の詳細を関係者と調整する。
- (4) 学会賞・学術賞受賞記念講演会を開催する。

### 1-6 渉外委員会

- (1) 日本地球惑星科学連合において日本第四紀学会の貢献を高めるために、2024年大会においても、『第四紀:ヒトと環境系の時系列ダイナミクス』と、『活断層と古地震』を第四紀学会としてセッション提案及び開催し、第四紀学会員の発表の場を用意するとともに、第四紀学に関連するセッションとの連携・共催を積極的にすすめる。
- (2) 防災学術連携体が主催するシンポジウムや企画に対して、日本第四紀学会としてのプレゼンスを高めるために積極的に参画する。
- (3) 自然史学会連合、地学オリンピック、ジオパーク学術支援連合等、国内関連学協会との連携を高めていく。

### 1-7 領域1「気候変動及び海洋の諸プロセス」

- (1) 気候変動及び海洋の諸プロセスに関するシンポジウムや巡検を企画・開催する。
- (2) JpGU2024において、関連セッションを開催する。

### 1-8 領域2「陸上の諸プロセス」

- (1) 陸上の諸プロセスに関するシンポジウムや巡検を企画・開催する。
- (2) JpGU2024大会に向けて、陸上の諸プロセスに関連したセッションの提案を検討する。
- (3) INQUA TERPRO コミッションの研究プロジェクトに領域メンバーの参加をうながす。

### 1-9 領域3「層序と年代基準」

- (1) 層序と年代基準に関するシンポジウムを企画・開催する。
- (2) 日本国内の第四系標準層序地域についての情報をホームページに掲載する。

### 1-10 領域4「人類と生物圏」

- (1) 領域に関係するシンポジウムを企画・開催する。

### 1-11 領域5「現代社会に関わる第四紀学」

- (1) 現代社会に関わる第四紀学に関するテーマでの、シンポジウムあるいは講演会等について、具体的な内容を決定し、実施する。
- (2) 本学会のパンフレットについて、今後、新しく加えるべき知見についての執筆者を選定、執筆依頼、編集、デザインのリニューアル等をすすめ、新パンフレットを作成する。

【総会資料 7】 2023 年度予算案

日本第四紀学会

2023年度予算案  
(2023年7月1日～2024年6月30日)

収入の部

科 目	2022年度予算額①	6月30日現在②	2023年度予算案	摘 要
会費収入	8,328,000	8,757,000	8,045,000	正会員865名、学生会員11名、賛助9社 (2023年7月1日現在)
正会員会費収入	8,128,000	8,557,000	7,845,000	通常会員会費 ¥7,740,000 学生会員会費 ¥55,000 海外会員会費 ¥50,000
賛助会員会費収入	200,000	200,000	200,000	20,000円×9社(10口)
誌代	600,000	385,023	600,000	定期雑誌購入、Back No
別刷代・超過頁代収入	250,000	516,700	250,000	62巻3～4号・63巻1～2号 別刷・カラー代等
雑収入	150,000	158,231	150,000	JST(科学技術振興機構)等
利子収入	1,000	138	1,000	預金利息
広告料収入	0	0	0	2023年大会予稿集広告無しの為
役員選挙積立金取崩収入	200,000	200,000	0	
INQUA対策積立金取崩収入	300,000	300,000	0	
名簿作成積立金取崩収入	0	0	0	
予備費積立金取崩収入	0	0	0	
収入合計	9,829,000	10,317,092	9,046,000	
前期繰越金	21,205,772	21,205,772	22,578,486	
合計	31,034,772	31,522,864	31,624,486	

支出の部

(単位: 円)

科 目	2022年度予算額①	6月30日現在②	2023年度予算案	摘 要
会誌発行費	3,101,200	2,993,073	3,101,200	第四紀研究 62巻3～4号・63巻1～2号
印刷費	1,500,000	1,595,330	1,500,000	62巻3～4号・63巻1～2号 (J-STAGE掲載費用含)
編集費	300,000	190,064	300,000	
編集人件費	1,201,200	1,101,100	1,201,200	編集書記手当
別刷印刷費	100,000	106,579	100,000	62巻3～4号・63巻1～2号
会誌・会報発送費	700,000	593,377	600,000	
会報発行費	785,000	766,828	785,000	第四紀通信30巻3～4号・31巻1～2号
印刷費	500,000	482,130	500,000	
編集費	75,000	75,398	75,000	第四紀通信編集費 (編集ソフト契約料等)
編集人件費	210,000	209,300	210,000	第四紀通信編集アルバイト代
学会HP運営費	170,000	80,720	1,670,000	HP更新アルバイト代、ドメインサービス・レンタルサーバー利用料、HP改修費用150万円
大会運営準備金	380,000	380,000	380,000	2024年大会運営準備金
巡検準備金	100,000	100,000	100,000	2024年大会分
講演会・シンポジウム費	50,000	0	50,000	
予稿集印刷費	0	0	0	
学会賞等顕彰費	350,000	173,964	60,000	賞状作成費・副賞等
会議費	60,000	8,500	150,000	zoomライセンス利用代 会場費等
通信費	380,000	173,012	200,000	会費請求書発送費、事務通信費等
旅費・交通費	100,000	86,321	250,000	執行部会・委員会等交通費
印刷費	350,000	349,081	350,000	学会専用封筒、コピー代
業務委託費	2,550,000	2,276,165	2,850,000	事務委託費、会員マイページ関連費用 (WEB決済運用費等)
領域活動費	750,000	0	750,000	15万円*5領域
領域1	150,000	0	150,000	
領域2	150,000	0	150,000	
領域3	150,000	0	150,000	
領域4	150,000	0	150,000	
領域5	150,000	0	150,000	
INQUA対策費	1,000,000	500,000	0	
役員選挙費	400,000	368,236	0	委員会交通費、選挙会告印刷費、マイページ選挙システム運用費、発送事務局費用
名簿作成費	-	-	-	
INQUA対策積立金繰入支出	0	0	500,000	
役員選挙費積立金繰入支出	0	0	200,000	
名簿作成積立金繰入支出	-	-	-	
予備費積立金繰入支出	0	0	0	
加盟学協会分担金支出	50,000	30,000	50,000	日本地球惑星科学連合、自然史学会分担金、防災学術連携体
国際科学技術コンテスト協賛金支出	50,000	50,000	50,000	国際地学オリンピック協賛金
雑費	50,000	15,101	50,000	振込手数料等
予備費	200,000	0	200,000	
支出合計	11,576,200	8,944,378	12,346,200	
次期繰越金	19,458,572	22,578,486	19,278,286	
合計	31,034,772	31,522,864	31,624,486	



## 【総会資料 8】2023-2024 年度役員・委員会委員等一覧

会 長	鈴木毅彦
副会長	北村晃寿、須貝俊彦
会計監査	藤原 治、植木岳雪
領域 1	領域代表 横山祐典 領域幹事 阿部彩子、池原 実、久保田好美、加 三千宣、平林頌子
領域 2	領域代表 吾妻 崇 領域幹事 石村大輔、奥村晃史、苅谷愛彦、久保純子、小松原純子、佐藤善輝、白井正明、堀 和明
領域 3	領域代表 里口保文 領域幹事 青木かおり、卜部厚志、岡田 誠、納谷友規、水野清秀
領域 4	領域代表 海部陽介 領域幹事 井上 淳、工藤雄一郎、齋藤めぐみ、中塚 武、那須浩郎、林 竜馬、百原 新
領域 5	領域代表 小荒井 衛 領域幹事 石原与四郎、木村英人、前杵英明、三田村宗樹、山田和芳
庶務委員会	委員長 山田和芳 委員 オブラクタ・スティーブン、佐藤善輝、水野清秀、工藤雄一郎、前杵英明
会計委員会	委員長 堀 和明 委員 平林頌子、納谷友規、齋藤めぐみ、小荒井 衛
編集委員会	委員長 苅谷愛彦 委員 加 三千宣、安江健一、青木かおり、宮入陽介、井上 淳、岩瀬 彬、石原与四郎
広報委員会	委員長 那須浩郎 委員 田村 亨、石村大輔、竹下欣宏、三田村宗樹
行事委員会	委員長 池原 実 委員 久保純子、西澤文勝、中塚 武、木村英人
渉外委員会	委員長 白井正明 委員 石輪健樹 (JpGU プログラム委員)、卜部厚志 (JpGU 環境災害対応委員)、林 竜馬 (自然史学会連合)、小荒井 衛 (防災学術連携体)、植木岳雪 (ジオパーク)、小森次郎 (地学オリンピック)
学会賞選考委員会 *	委員長 鈴木毅彦 委員 齋藤文紀、久保純子、百原 新、小野有五
論文賞選考委員会 *	委員長 岡田 誠 委員 澤井祐紀、阿部彩子、奥村晃史、黒木貴一
評議員会議長	三田村宗樹
議長代理	水野清秀
オンライン委員会	委員長 久保田好美 委員 小松原純子、下岡順直、中塚 武、目代邦康
名誉会員候補者選考委員会 *	委員長 小岩直人 委員 加 三千宣、兵頭政幸、江口誠一、前杵英明
法務委員会	委員長 奥村晃史 委員 三浦英樹、水野清秀、近藤 恵、三田村宗樹

\*：2023 年度のみ

以上

## ◆鎮西清高元会長のご逝去を悼む

2023年7月27日、本学会の第13代会長（1995～1996年度）で名誉会員である鎮西清高先生が逝去されました。1933年12月に、長野県下伊那郡下條村のお生まれで享年89歳でした。

先生の生家は大山田神社の神主を務める鎮西家であり、同社は延長5年（927年）以前の古社とのことです。鎮西家に伝えられた「大地震之記」には、1707年の宝永地震と宝永噴火の記述があり、鎮西先生が地球科学に興味をもたれたことも因縁のようなものを感じます。

鎮西先生が、日本古生物学会の12代会長を務めた鹿間時夫氏の秘蔵っ子であることは、50代以上の古生物学者には大変に有名な話です。鹿間氏は、終戦後1947-1950年に飯田高松高等学校に奉職し、鎮西先生や長谷川善和氏（横浜国立大学名誉教授）らを指導しました。1950年に鹿間氏が横浜国立大学学芸学部に移られると、鎮西先生や長谷川氏は、鹿間氏を慕って、横浜国立大学学芸学部に進学し、引き続き教育を受けたのです。

その後、鎮西先生は、東京大学大学院の地質学専攻博士課程に進学され、1961年3月に「馬淵川谷新第三系の地質学的及び古群集生態学的研究」で東京大学より理学博士の学位を取得しました。馬淵川は岩手県北部および青森県南部を流れる一級河川です。この研究成果は6年後に、Chinzei, K. and Iwasaki, Y. (1967) Paleocology of shallow sea molluscan faunas in the Neogene deposits of Northeast Honshu, Japan. Transactions and Proceedings of Palaeontological Society of Japan, New Series, 67, 93-113. として公表され、世界に

先駆けて、新第三系浅海性貝化石群の研究を通じ、近縁種が異なる時代・地域の同様な環境で同様な生態的ニッチを占めるという時間的平行現象を提唱しました。

上記の論文の共著者の熊本大学名誉教授の岩崎泰穎氏は、三菱財閥の創始者・岩崎弥太郎氏の曾孫です。そして、岩崎氏の妹さんが鎮西先生に嫁がれたので岩崎氏は年下ですが、鎮西先生の義兄となっております。

鎮西先生は博士課程を修了後、東京大学理学部の助手となり、1972年に助教授に就任し、1986年に京都大学理学部教授に就任されました。東京大学の教員時代に行った重要な研究には、日本海の形成に関する研究、二枚貝カキ類の適応戦略に関する研究、最終氷期以降の日本沿岸の古海洋学的研究があります。

日本海の形成に関する研究は、博士号の取得を通じて修得した浅海性貝化石の種同定のスキルを用いて、新第三系浅海性化石群の時空分布を編纂して、古生物地理学的視点から日本海の形成に関して考察した研究です。

岩礁に固着し海水中の浮遊物を餌とするカキ類の中に、潮間帯の泥底で“カキ礁”を形成する種が、様々な時代の複数の系統で知られていますが、鎮西先生はカキが幾つかの特徴的な適応戦略を取ることで進化・適応したことを明らかにし、カキ類に対する従来の見方を一変させました。

カキ礁は、日本の内湾に普通に見られ、古東京湾の完新統・下総層群の内湾性堆積物からも普通に産出します。鎮西先生は、形態変異の極めて大



写真1 前列、左から神谷隆宏氏（現金沢大学教授）、鎮西清高先生、小西健二氏（金沢大学名誉教授）。後列、左から長谷川卓氏（現金沢大学教授）、北村。  
1988年12月7日 金沢市で撮影



写真2 左から小西健二氏（金沢大学名誉教授）、池谷仙之氏（故静岡大学名誉教授）、鎮西清高先生  
2003年6月28日 日本古生物学会 静岡大会

きいカキ類は種同定が困難であることから「恐らく調べても労多くして功少ない、いわばゲテモノとして放置されてきたのであろう。」と記しています（化石, 31, 27-34）。その中でも代表的なゲテモノで、形態変異の大きい *Crassostrea* 類における、堆積速度が大きく、軟かで不安定な砂泥底への適応戦略をリレー型戦略と名付けました（Chinzei et al., 1982）。これは、集合着生の性質により、成体のカキの上に次の世代が付着して成長し、次々と積み重なっていく、という戦略です。

カキの研究に見られるように、鎮西先生の研究スタイルは、野外における化石産状の観察と化石化過程、生態学、硬組織学的研究などの複合的なアプローチを有機的に結合する手法を用いています。このスタイルは、他分野の研究者との共同研究へと展開され、次の2つの日本周辺の古海洋変遷に関する重要な研究成果を挙げました。第1に、関東地方の遺跡・自然貝層から産する二枚貝ハマグリノの殻の成長線解析と酸素同位体比から9,000—1,500年前までの水温変動を定量復元した研究（Chinzei et al., 1987a）、第2に関東地方沖の太平洋の3本のコア試料に関する微古生物・地球化学的分析から約12,000年前に起きた一時的な寒冷化現象（新ドリラス事件）が、北西太平洋にまで及んでいたことを初めて明らかにした研究（Chinzei et al., 1987b）です。

私は、博士課程において、更新世の氷期・間氷期サイクルに伴う日本海の浅海性貝類群集の地理分布応答の研究を行っており、鎮西先生とは対象生物種も研究内容も共通性がありました。後日、鎮西先生から紹介された論文「自生化石群と混合化石群—男鹿半島鮎川層の化石群を例に一」（鎮西, 1977, ベントス研連誌 13/14, 39-43）の貝化石の層位分布の調査方法は、私の調査方法と全く

同じであることを知りました。これらの研究内容・方法に加えて、私も鎮西先生と同じ長野県の生まれなので、親近感を感じていました。鎮西先生の母校の飯田高松高等学校（現在、飯田高校）の出身者には故松島義章氏もおられ、お二人には同郷なので親しくしてもらいました。さらに、私の指導教員の小西健二氏は、鎮西先生と親しく、D. M. Raup & S. M. Stanley の「Principles of Paleontology」の日本語訳「古生物学の基礎（花井哲郎・小西健二・速水 格・鎮西清高、どうぶつ社）」も共同で行っていました。そのような経緯・間柄から、私の博士号の外部審査員を鎮西先生に担当いただきました。その審査後に、鎮西先生からは、博士号を取った研究の中で、君のフィールドの調査面積は、世界で一番小さいかもしれないね、という言葉いただきました。

さて、博士取得後、私は鎮西先生の下で日本学術振興会特別研究員を過ごすこととし、1991年4月から1993年9月まで、鎮西先生の受け入れで日本学術振興会特別研究員として京都大学理学部地質学鉱物学教室に在籍し、先生から研究指導や英語論文の執筆を指導いただきました。また、先生から様々な話を聞いたので、そのいくつかを紹介します。

まずは、鎮西先生の長年の研究対象としてきたカキの飼育の難しさについてです。先生は、カキの生態を調べるために、飼育実験を試みました。水槽にカキの餌用に2週間ほどかけて珪藻を育て、水槽が白くなるまで増やしたのだが、水槽にカキを入れたら、あっという間に珪藻をろ過して、水槽の水がきれいになってしまった。それで、珪藻の飼育が追いつかず、カキは餓死した。この実験で、カキは想像以上に大食いだと分かったと話しておられました。

また、私が京都大学に移って直ぐに、理学部教授会から戻られた先生は、「京都大学では授業時間が同じであれば、授業の単位が修得できるというのだが、この制度はおかしいのではないかと発言したところ、数学の教授から『なにがおかしいのですか?』と言われたのだが、北村君、僕の方がおかしいのかね」と仰られました。「いえ、先生の方が正しいです」と回答しました。1995年に鎮西先生は理学部長に就任され、1997年に京都大学を定年退官しましたが、この授業システムがなくなったのは、2010年代になってのことでした。

このような話を聞くのは、たいてい鎮西先生の居室であり、先生から度々お茶をいただきました。お茶の入れ方は、お湯をまず人数分の湯のみについてから、湯のみのお湯をゆっくり急須に注ぎ、それから湯のみに均等につき分けるもので、上品な作法があるのだなと感動しました。

1990年代前半、鎮西先生は国際誌の *Palaeogeography, Palaeoclimatology, Palaeoecology* の日本でただ一人のエディターでした。私は京都大学在籍時に同誌に博士論文の内容を投稿した際には、原稿を何度も見ていただき、謝辞にも鎮西先生のお名前を記しました。この論文が受理された後、先生から、実は査読が回ってきたと打ち明けられました。当時の原稿は紙なので、京都大学からオランダに送った原稿の一部が、投函した京都大学に送られ、同ルートでの往復があったわけです。

鎮西先生は、ドイツの著名な古生物学者の A. Seilacher 氏とは共著論文を執筆したこともあり、私の京都在籍中に同氏が数か月間京都大学に滞在されていました。また、アメリカの著名な古生物・進化学者 S. J. Gould 氏も来日時に先生を訪ねて来られ、これらの著名な古生物学者と話す機会をいただきました。

鎮西先生が第20代の日本古生物学会会長を務められたのは1991年1月31日から1993年1月29日でしたので、私が京都大学に在籍していた時です。私は、現在、第36代の日本古生物学会会長を務めており、会務や日程調整などを頻繁に行っています。その当時、鎮西先生から学会会務についての話題は記憶に残っていませんが、先生のことですから業務を迅速に行われていたのでしょう。

1993年に私が静岡大学に採用されてからは、学会でお会いするくらいでしたが、再び鎮西先生と交流することとなったのは、2015年に名古屋における第四紀学連合 (INQUA) 第19回大会の開催に合わせた *Quaternary International* 誌の特集号

「*Japanese Quaternary Studies*」の編集作業でした。鎮西先生と松島義章氏が共著で執筆された日本本土の太平洋沿岸の完新統から産する浅海性貝類群集の変遷と古環境変遷に関する英語論文の査読をすることになりました。この論文について、先生は「松島さんの研究成果が国際誌には公表されていなかったため、この機会に公表しようとした」と仰られていましたが、投稿原稿の図が揃っていなかったため、受理には至りませんでした。実は、私の査読のコメントを読まれた鎮西先生からは、共著者に加わって欲しいと言われたのですが、静岡県内の津波堆積物調査を行っており、今は無理ですとお断りをしました。その後、先生の体調が悪くなりました。そうするうちに、松島氏が2021年1月12日にご逝去されてしまいました。そして、今年7月27日に鎮西先生がご逝去されてしまいました。この連続の喪失に、大変深い悲しみを覚えております。先生が残された仕事を完成させることのできるの、今のところ、私自身しかいないと感じております。先生の偉業を心から賞賛し、同時に第四紀学への重要な貢献に繋げるため、最大限の努力を惜しまない覚悟でございます。鎮西先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(北村晃寿)

#### 引用文献

- Chinzei, K., Savazzi, E. and Seilacher, A., 1982, Adaptational strategies of bivalves living as infaunal secondary soft bottom dwellers. *Neues Jahrbuch für Geologie und Paläontologie, Abhandlungen*, 164, 229–244.
- Chinzei, K., 1986. Opening of the Japan Sea and marine biogeography during the Miocene. *Journal of Geomagnetism and Geoelectricity*, 38, 487–494.
- Chinzei, K., Koike, H., Oba, T., Matsushima, Y. and Kitazato, H., 1987a. Secular changes in the oxygen isotope ratios of mollusc shells during the Holocene of Central Japan. *Palaeogeography, Palaeoclimatology, Palaeoecology*, 61, 155–166.
- Chinzei, K., Fujioka, K., Kitazato, H. Koizumi, I., Oba, T., Oda, M., Okada, H., Sakai, T. and Tanimura, Y., 1987b. Postglacial environmental change of the Pacific Ocean off the coasts of Central Japan. *Marine Micropaleontology*, 11, 273–291.

## ◆会誌（62 巻 3 号）封筒記載の会員番号記載不備のお詫び

拝啓 ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、この度 8 月に刊行されました第四紀研究 62 巻 3 号の送付時に封筒に印字された会員番号に誤りがございましたことを、ここにご報告いたします。事務局の不手際にてご迷惑をおかけしてしまい、誠に申し訳ございません。

正しくは、本会誌送付時の封筒に印字の会員番号となりますので、ご確認いただけますと幸いです。

今後はこのようなミスのないよう努めて参りますので、何卒ご容赦いただけますようお願い申し上げます。

何かご不明な点がございましたら、事務局までご連絡ください。

今後とも、何卒よろしくお願い致します。

敬具

日本第四紀学会事務局  
〒169-0072 新宿区大久保 2 丁目 4 番地 12 号  
新宿ラムダックスビル (株) 春恒社 学会事業部内  
Email:daiyonki(at)shunkosha.com

## ◆巡検「入間川沿いに露出する下部更新統仏子層の観察」

悪天候のため中止にした日本第四紀学会 2023 年大会の専門巡検の代替企画です

主 催：日本第四紀学会・領域 3（層序と年代基準）

案内者：納谷友規・水野清秀（産総研・地質情報）

参考地形図：2 万 5 千分の 1 地形図「飯能」

日 程：2023 年 12 月 16 日（土）日帰り

集 合：西武池袋線仏子駅北口 9:30

解 散：西武池袋線元加治駅 15:30（予定）

対象者：日本第四紀学会会員とするが学生の場合は非会員の参加を受け付ける

定 員：20 名

参加費：100 円（保険料）

申込方法：1) 参加者の氏名、2) 所属、3) メールアドレス、4) 当日連絡がとれる携帯の電話番号、をご記入のうえ、納谷（t-naya(at)aist.go.jp）までメールで連絡ください。2023 年 12 月 8 日 17:00 締め切り。

※小雨決行 ただし、前日の 17 時の時点で大雨などの荒天が予想される場合、中止を判断する可能性があります。また、天候の急激な悪化により当日中止を判断する可能性もあります。やむを得ず中止になった場合は 2024 年 2 月か 3 月頃に延期する予定です。

※昼食は各自持参ください。行程の都合上 11 時頃に早めの昼食を取る予定です。集合場所の仏子駅前にもコンビニエンスストアがあります。

※長靴を持参することを推奨します。特に、河床は滑りやすいのでスパイク付きの長靴を推奨します。

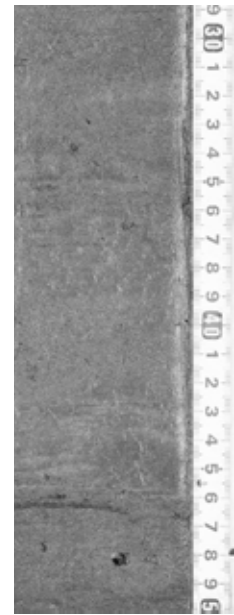
概 要：関東平野西縁の丘陵部に露出する仏子層は、広域テフラを挟在しながら植物・動物化石が多産する海成層と淡水成層で構成されます。かつて仏子層の年代は 150～100 万年前と考えられていましたが、テフラ対比を中心とした層序学的研究の進展によって、現在では 250～150 万年前の地層であることが明らかになり、その年代観は大きく変わりました。仏子層は沿岸浅海成層と淡水成層の繰り返しからなりますが、年代観が更新されたことにより古環境変遷の地質学的意義を改めて考えることができるようになりました。本巡検では、主に加治丘陵の入間川沿いに露出する仏子層下部の露頭観察を通じて、層序、テフラ、産出化石や年代について観察・議論する機会とします。

## ◆海洋コア岩相記載武者修行イベントの参加者募集

コア試料の岩相記載をしていて、こんな悩みをお持ちではないだろうか。「これは、通常の堆積層なのか、イベント層なのか」「どこからどこまでがイベント層なのか」「これは、テフラなのか、再堆積したものなのか」「同じものでも見る人によって、解釈が違う」「自分の岩相記載が正しいかわからないので、コア試料の堆積環境や年代モデル、古環境シグナルを解釈してはみたものの、どうも自信がない」。

岩相記載に、悩みはつきないものである。かといって、自分の岩相を見る眼をアップデートしたいのにそうした機会は少ない。このような方にお薦めのイベント情報です。

次世代の地球科学を担う人材育成の一環として、コア試料の岩相記載経験者(博士後期課程院生、PD)を対象に、これまで長年かけて何千メートルもの堆積層を見てきた岩相記載のスペシャリストを講師として招き、岩相記載武者修行イベントを開催します。我こそはと思う方、ぜひご参加ください。



**場 所**：高知大学海洋コア国際研究所（高知県南国市物部乙 200）

**日 程**：2024 年 2 月 1 日（木）～ 4 日（日）

**参加資格**：記載経験者（堆積物から堆積過程や環境変化を読み取りたいと思う意欲のある方で、PD クラスまでを優先。十分な経験を積んでいる人は除く）

**人 数**：最大 8 名（応募時の応募動機、経験度などを考慮して選抜する）

**講 師**：池原 研（産業技術総合研究所）

**アシスタント**：加 三千宣（愛媛大学）・久保田好美（国立科学博物館）

**試 料**：別府湾コア試料、日本海溝コア試料

**内 容（予定）**：

1 日目 9:00-12:00：ガイダンス；別府湾コア 4 セクション程度記載作業

1 日目 13:00-17:00：記載作業の継続；観察のまとめ（1 時間）；各自の観察結果の発表

2 日目 9:00-12:00：グループでの討議（1 時間）＝何が問題かをまとめる；問題点について解説

2 日目 13:00-17:00：日本海溝コア 4 セクション程度記載作業；観察のまとめ

3 日目 9:00-12:00：各自の観察結果の発表；グループでの討議

3 日目 13:00-17:00：問題点について解説；2 つのコアを並べて、意見交換

4 日目 9:00-12:00：2 つのコアの記載作業を通じて、それぞれが大事だと思ったことを各自プレゼン  
＝参加者間で議論；終了

**参加費**：2,000 円

**申し込み**：以下の Google フォームから参加希望をお知らせください。

<https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSfkWauYQKnrvFsG7Ievrpta-aKa2xGKLVPQJHW-7pYHTGo9g/viewform>

**募集締め切り**：2023 年 12 月 11 日（月）

**主 催**：日本第四紀学会・高知大学海洋コア国際研究所

**共 催**：日本地球掘削科学コンソーシアム（J-DESC）（予定）・日本堆積学会

**備 考**：宿泊は高知大学宿泊施設（厚生会館、高知県南国市物部乙 200）を予定。また、参加者に対して旅費支援を検討中（詳細は上記 Google フォームを参照）。

**問い合わせ先**：愛媛大学沿岸環境科学研究センター 加 三千宣 (kuwae.michinobu.mc(at)ehime-u.ac.jp)



★★★ 情報発信を希望される方へお願い ★★★

日頃から日本第四紀学会のコミュニティへ情報提供くださり、ありがとうございます。  
提供された情報の円滑な配信を目指して、広報委員会から皆様へ、以下のお願いを致します。

- (1) 情報発信の手段として、ML の積極的な使用をお願い致します。
  - 1) メール本文に配信内容のタイトルと簡単な情報を書いて広報委員会アドレス (jaqua-koho(at)quaternary.jp) へご投稿ください。  
メール本文の情報は常識的な長さでお願い致します。
  - 2) 広報委員会にて文言の微修正を行う、または投稿した方に情報の修正・追加をお願いすることがあります。
  - 3) イベント等の周知などで当該イベントの URL がある場合、その URL も載せてください (ただし上記の通り、メール本文にも簡単な情報も載せるよう、お願い致します)。
  - 4) 第四紀学にほとんど関連しないものについては配信をお断りすることがあります。
  - 5) 学会、研究集会のお知らせでも、第四紀学会の会員間で参加費等に不平等が生じるものは配信しませんので、ご了承ください。
  - 6) 添付ファイルは ML に配信致しません。
- (2) 第四紀通信への掲載依頼、日本第四紀学会 HP への掲載依頼も受け付けておりますが、基本的に、主催・後援イベントなど第四紀学会として会員に広く周知する必要があると認められる情報、「公募・助成」情報(こちらは HP のみの掲載となります)等に限られます。詳しくは広報委員会アドレス宛に、個別にご相談ください。
- (3) 第四紀通信の表紙用の写真(または作成した画像)を受け付けています。詳細は第四紀通信第 27 巻 6 号の巻末をご覧ください。
- (4) 第四紀通信は 2 月・5 月・8 月・11 月の初旬に刊行予定としていますが、情報をなるべく早く皆様にお届けできるように、版下が完成した段階でホームページに掲載していますので、ご利用ください。

日本第四紀学会広報委員会：那須浩郎・田村 亨・石村大輔・竹下欣宏・三田村宗樹  
広報書記：岩本容子・奥村公弥子  
日本第四紀学会ホームページ <http://quaternary.jp/> から第四紀通信バックナンバーの PDF を閲覧できます。

日本第四紀学会事務局  
〒169-0072 東京都新宿区大久保 2 丁目 4 番地 12 号 新宿ラムダックスビル  
株式会社春恒社 学会事業部内  
E-mail : daiyonki(at)shunkosha.com 電話 : 03-5291-6231 FAX : 03-5291-2176